

正・政・清・聖・性・醒

炉ばたセイ談



令和元年秋号

巻頭言

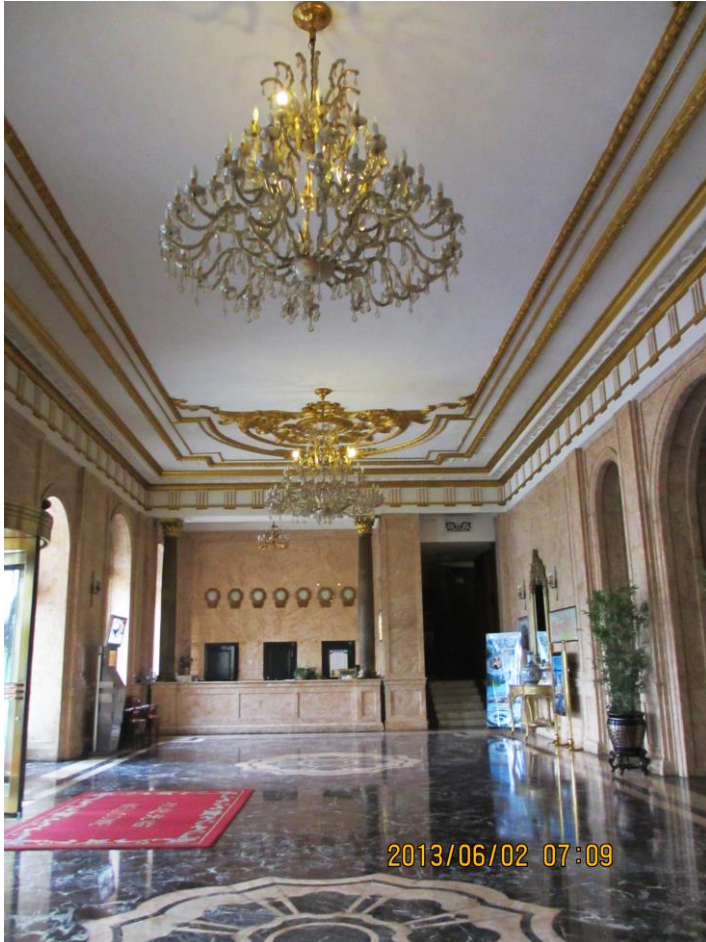
とまりては立ち

とまりては発ち

澁谷 繁樹

炉ばたセイ談は、入来院貞子さん、桐野三郎さんに続き相星雅子さんも失った。相星さんと付き合いは女性書き手と新聞記者の關係で始まった。仕事で出発した關係なのに心ざわりが柔らかくてどうしてだろうと思っていたら、ある日、夜更けまで杯を交わしてなるほどなと理由に辿り着いた。家族の話になりどんなお父さんに育てられたのと聞かれ、中国大陸育ちで学徒動員組、軍歌は決して歌わない人ですわとこたえたら、アタシハネエ、大連育ちの引揚者なのよねえ、と画の膝がくっつきかねないくらい距離が消えてしまった。どこにいようとエトランゼ(異郷者でもあり旅人でもあり)気分が共通していたのかもしれない。鹿児島知事選に引く張り出されそうなんだけどと相談を受けた夜もある。憲法擁護派だからといって人材不足の陣営に付き合つ義理はないんじゃないですかと申し上げたら、ソウヨネエ、ソウダワヨネエとお笑いになった。セイ談にとつては損失に違いないにしても、旅人はゆきくれだけの群すずめとまりてはたちとまりてはたち、とまりは泊まり、止まり、たちは経ち、立ち、発ち、行くとして居る背中止められない。見送る言葉は「再見」がふさわしい。いつかまたどこかでお会いしましょう、相星さん。(※次ページに巻頭言添付写真があります。)

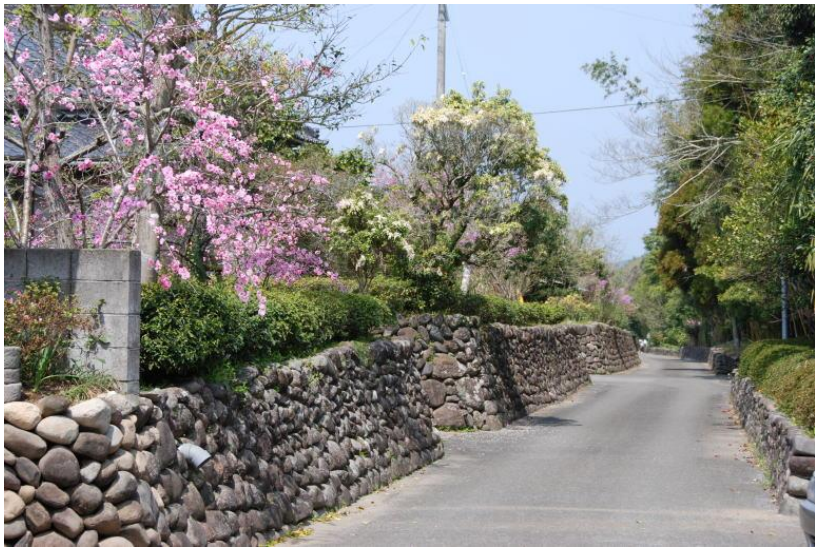
(炉ばたセイ談会会長)



2013/06/02 07:09

『大連の旧やまとホテルロビー』（巻頭言添付写真）

ドイツ、ロシア、日本と侵略した国々の面影と中国のアクの強さも漂っている。



入来麓（国の伝統的建造物群保存地区・武家町）の春

相星雅子さんを悼む

憲法オネエちゃん



澁谷 繁樹

三畳にも足りない自室の半分を占める寢台に中華人民共和国地図を広げる。寢台の三分の二近くが中国と化す。中国人民解放軍製作の地図には、北海道と銚子半島の東部分が欠けた日本も掲載されている。鹿児島と大連がほぼ千^キ、大連と瀋陽の間が三百^キ、三つの都市は片方の掌と指五本で十分押さえられる距離に位置している。

二〇一九年三月十二日に亡くなった相星雅子さんは一九三七年大連生まれ、四歳で瀋陽（当時の奉天）に移り、一九四六年に鹿児島に引き揚げてくる。

家の祖父母は瀋陽からさらに北へ四百五十^キのハルピンにいた。日本の大学にいた父は学徒動員で幹部候補生を拒否、小倉の頼りない高射砲陣地に兵卒配属され届きもしない弾で米軍機を迎え撃たされていた。近くに落ちた爆弾に吹き飛ばされたり経験はしているにせよ、敗戦は内地で迎えている。祖父母も運に恵まれたのか、引き揚げの苦労話を耳にした覚えはない。

相星さんからは何度か日本まで帰る旅の思い出を聞かされた。南日本文学賞（一九九〇年・第十八回）を小説「下関花嫁」で受賞している作家だから、敗戦引き揚げ行は文章でも結構な分量が残っている。大仰には書かない、悲嘆は沈潜させる、平易を心掛ける書き手は淡く軽く綴っているものの、背景を成す血、涙、汗、呻吟は色濃く立ち上がってくる。

「進駐していたソ連兵士に目をつけられないため、母も手伝い人も髪を刈って男装したこと、水道が出なくなり夕やみにまぎれてリヤカーにバケツを乗せてくみたてに行つた光景、少し向こうの戸外の井戸ポンプへ様子を見に行つた父の頭上に中国人の男がクワを打ちおろし、危うく避けたが耳のつけ根に深手を負つた日のことなどは覚えている」(随筆集「おそれたまえ百万人の隠れ王を」・二〇〇五年刊)

日中の近現代史を両方の国家で実際に嘗めさせられた経験談は個に立脚しながらも同時に普遍性も纏つて突き刺さってくる。

「つちかつた生活も地位も財産もすべて捨てて、屋根のない貨車に乗つてからの祖国への旅は泥汁とシラミにまみれてどのくらい続いたのだろう。コロ島で乗船してから、いくつもの水葬の気配の中で人々は恐ろしい船

酔いに苦しんだ。船底に転々と転がりながら、私ははじめて天性にして無尽蔵な遊び魂を失つていた」(前同)

一九三一年九月十八日午後二〇時二〇分、瀋陽郊外の柳条湖、南満州鉄道線路で爆発が起き、十五年に及ぶ日中戦争の幕が開く。独断と大風呂敷で鳴らした関東軍の終わりの始まりは、日本では満州事変、中国では九・一八事変と呼ぶ。爆発現場には歴史博物館が建てられ傲慢、残虐な日本を映像や人形で徹底的に叩きつけてくる。相星さんが言うコロ島は遼東半島の大連の対岸の都市で葫蘆島と書き引き揚げの拠点港だった。

七、八歳で絶望を見た相星さんの目は一九四七年五月三日の憲法施行で輝きを取り戻す。「平和と主権在民をうたう画期的な新憲法が生まれた。私の通つていた中洲小学校でも甲南高校の講堂を借りて祝賀の学芸会が行われ、

四年生だった私は施行記念国歌を振り付けたダンスで舞台をふんだ。新しい憲法は血の通う弟のように、子どもだった私たちにしつくりとなじみ、ともに育った。そして三十数年、その弟はいま、出生の秘密を最大のたてにとられ、まっ殺の危機にさらされている。

その時子どもだった私たちが今やるべき急務は、その時大人だった人々へ、その時生まれ ていなかった人々へ、その時の真実を思い出させ、伝えることではないだろうか」(前同)

よみがえる。 入来院家座敷で当主と相星さんが憲法をめぐり対立、ときに声が甲高くなる当主に貞子夫人がやんわり嫺やかに眉を顰め小声で諫め、声色は同じでもいつかな退かない相星さんを「まあまあ」と桐野三郎さんが柔らかく丸く包みこんでいくのを。夏の恒例出し物だった当主雅子論争が消えてからもう何年になるか。 貞子夫人の遺影に手を合わ



酒席でも声は高くない代わりに自説は曲げなかった。右端が相星さん。



相星さんの生まれ故郷大連の旧日本人街は高級住宅地となり、見た目もメニューも高価な河豚店もある。



1600年代には故宮も置かれた瀋陽 中国の餃子の発祥地を自称する餃子屋の焼き餃子。

せていると蟬の声の合間に「んなこと言ってるから社会党は潰れちまうんだ」「アナタ、たいがいのところまで」なにがつぶれているんですか。思想は死なないんですよ」「さてさて、楽しく飲み直しましよか」、それぞれの声が聞こえるだけでなく顔までも見えてくる。

引用させていただいた相星さんの随筆集の著者紹介に元号は出てこない。西暦で統一している。らしいなと思う。憲法を弟と切り切る女性は「憲法オネエちゃん」と呼んでも怒られないはずとも考える。故郷としての思い入れの深さだろう。作品中、瀋陽は奉天と表記、満州も中国東北地方ではなく満州もしくは旧満州と書く。甲子園では郷土勢への傾きは淡泊、五輪でも日本への応援はアツサリ、日本のほかに中国東北地方にも郷愁を抱く人間としての世界観かもしれないと呟く相星さんが最期に見た古里の夢は、どっちだったろ

う、日本か、それとも。
いずれにせよ、今度、大連と瀋陽を訪れたら、最初の一杯は憲法オネエちゃんに捧げるつもりでいる。

(元新聞記者、炉ばたセイ談会会長)



鶴瓶師匠と我が父



入来院 久子

今から7年前の秋。前年に母を突然の事故で亡くし独居老人となつて寂しく過こしていた父の元にカメラクルーが押しかけた。NHK「家族に乾杯」のロケだった。

薩摩川内市に元日本バレーボール代表のメダリストである竹下佳江さんと番組ロケをしていた鶴瓶師匠が単独となつた際に、真っ先に訪れたのが入来町の麓地区だったのだ。

最近「日本遺産」に認定された麓の武家屋敷群なのだが、当時の鶴瓶師匠が観光マップを見て麓を訪れたのかは定かではないが、とにかく近所の武家屋敷の石垣を見て回って出

会つたお婆さんに鶴瓶師匠が我が家を案内されての突然の訪問だった。

「家族に乾杯」はマジで突然にやってくる。「ごめんください！」とやってきた鶴瓶師匠にまるでバカボンのパパのようなデカパンツ姿で現れた父は鶴瓶師匠より、後ろにいたカメラクルーに驚いた。「お？珍しいね！何事ですか？」と尋ねる父に「家族に乾杯という番組で来ました。」と説明する鶴瓶師匠。

「家族に乾杯」は、僕は。去年妻に死なれたもんだから、毎日泣いてますよ。」父のこの返事で始まった入来院家ロケ。鶴瓶師匠は内心『しまった！』と思つたに違いない。だつてこの番組は日本各地のほのぼのとした家族風景を紹介して茶の間に笑いを届ける大人気の番組だもの。毎日泣いて暮らしている独居老人なんてとても笑えない。

それでも「仏壇にお参りさせてください。」

と優しく仏間に上がり込んだ鶴瓶師匠はすぐに笑うことになる。師匠が仏壇に座ると奥でゴソゴソ動く父。「入来院さん、お茶なんか要りませんよ。」と言った鶴瓶師匠に父が「もちろん出しません！」と返したからだ。父がゴソゴソしていたのは自己紹介で名刺を渡そうと名刺入れを探していたのだった。父は実は「家族に乾杯」を観たことが無かったし、鶴瓶師匠をTVCMでしか拝見したことがなかったから『見たことある顔』くらいだったわけだ。

そもそも番組や師匠をよく知っていたとしても、父のことだからマイペースに同じ態度で名刺を差し出していたかもしれないが。

仏間で父と会話を始めた鶴瓶師匠。床の間や欄間を褒めても「くだらない。勝手に大工が選んだだけだ。目立つのは下品！」と持論を展開する父の語り口にお笑いのプロが大笑

いすることとなる。結局、お茶も出さなはずが数時間も話し込んだのちに、父は鶴瓶師匠にご機嫌で焼酎を振る舞うことになった。とにかく、母がいなくなつて寂しくなる夕方に、母の話を聞いてくれる鶴瓶師匠が嬉しかったのだらう。そして飄々と思うことを口にする父を鶴瓶師匠は気に入ってしまったようだ。鶴瓶師匠も大学生の頃に奥様と出会って結婚している愛妻家だ。父が亡くした妻を恋しいという想いに酔っぱらっていたのもあるだろうが大泣きしてしまった師匠だった。

それほど恋しいと想う素敵な奥様に会つてみたかった・・・と口にした鶴瓶師匠はその翌年、母の三回忌に奥様とお弟子さんを連れてプライベートで我が家をまた訪ねてくださった。わざわざ母のために座敷で落語を披露してくださったのだ。放送されなかったが、番組ロケ中の酒の席で「この座敷で奥様の三



鶴瓶師匠と父（2013年5月3日、母の三回忌法要にて）



鶴瓶師匠ご夫妻と入院院家家族写真（2013年5月3日、母の三回忌法要にて）

回忌に落語をさせてください。」と言ってくださった鶴瓶師匠。それを父から聞いた私は、「あれだけ忙しい方だし、酔っぱらって言ったことだろうから、本気にしちゃダメだよ！」と父に言っていたのだが、鶴瓶師匠は誠実な有言実行の人だったのだ。

かくして母の三回忌は午前中の法要、お斎の後、東京から駆け付けた鶴瓶師匠のサプライズの落語会となった。

鶴瓶師匠が我が家にかかるなり私服から着物に着替える間、父が法事に集まってくくださった方々に落語会となった経緯を話し、着替え終わった師匠がそれに加わると、まるで即席漫才となった。

師匠の奥様は「素人とは思えない！」と父の喋りを感じし、前座を任された師匠のお弟子さんは「出にくい！」と冷や汗をかいていた。

それでもお弟子さんの落語は『動物園』で子供たちにも分かりやすい楽しいものでしっかり笑いを取っていたし、一方、師匠の落語は『錦木検校』というお殿様と按摩師の最後は泣ける人情話だった。

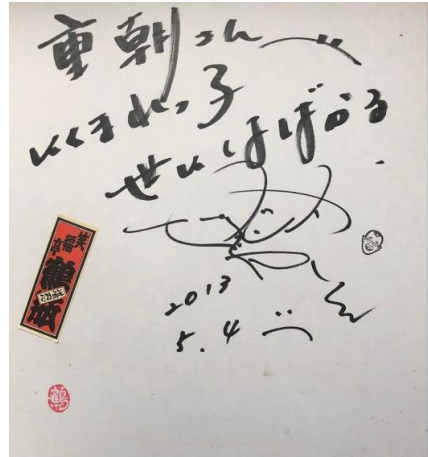
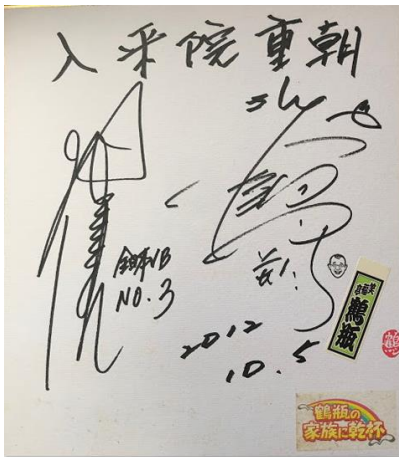
私はとても感動してしまい、有頂天でその後師匠や奥様と会食させていただいたのだが、その時師匠が私に「あなたがご兄弟の中で一番お父様に似てはりまん。」と言われて、驚いた記憶がある。

それでも実は父には似ず、凶々しい私は「東京にお越しの際は連絡してください。」というその時の社交辞令を真に受けて、先日鶴瓶師匠に「今年は父が米寿なので、8月に上京して親類家族が集まって品川プリンスホテルでお祝いします！」と電話をしてみました。すると「その頃は番組のハワイロケかもしれません。それでも変更になったらお伺いします

ので、お祝い会場をショートメールに書いておいてください。」と言ってくれました。なんと優しい鶴瓶師匠。

まあ、突然のハワイロケ中止で顔を見せてくたされれば嬉しいが、そうでなくても久しぶりに電話で父と会話してくださったのがありがたく嬉しかった。

7年前の「家族に乾杯」の収録時にお電話で出演してくださり母のことを「素晴らしいおなごでした。入来院どんには過ぎた嫁御でありましたよ。」と褒めてくださった十四代沈壽官さんが先月92歳でお亡くなりになった。十四代沈壽官さんも奥様に先立たれて、素晴らしいお仕事をされながらも切ない時間を過ごされていたのだらうと想像するのだが、我が父より先に天国で奥様にお会いできた。ここで最後に十四代沈壽官さんの冥福を心からお祈りいたします。



NHK「家族に乾杯」ロケ（2012年10月5日）で頂いた鶴瓶師匠の色紙（左）と母の三回忌法要（2013年5月3日）で頂いた鶴瓶師匠の色紙（右）

追記

八月二十四日に東京の品川プリンスホテルでの父の米寿祝いを無事に終えることが出来、当日は総勢38名の出席者で賑わいました。

ホテルの上層階のレストランの大きな個室で執り行ったのですが、個室のドアを開けた途端に豪華絢爛のスタンド花が飾られていて出席者一同驚きました。それは鶴瓶師匠から父に届いたお祝いでしたので尚の事驚いた次第です。

しかもお花だけでなく、鶴瓶師匠は父の米寿のお祝いメッセージをNHKのディレクターさんを通してDVDにして送ってくださいだったので。レストランでプレーヤーとTVをお借りしてお祝い膳をいただきながら視聴したのですが「家族に乾杯」の収録後に撮影し

たであろう小野アナウンサーとの掛け合いメッセージは会場を笑いの渦にした楽しい内容でした。

父が大感激したのは言うまでもありません。

参加者も鶴瓶師匠の優しさに心打たれていました。スタンド花とお祝いメッセージでとても華やかな「米寿祝いの会」となり、「さすが久子！」と叔母たちにも褒めていただき、父も本当に喜んでくれたので、図々しく私が鶴瓶師匠に今回の米寿祝いでの上京をお知らせしてよかったです。

当日の写真の父や参加者の笑顔を眺めてみると、改めて快く父の米寿をお祝いしてくださった鶴瓶師匠とNHKの「家族に乾杯」の番組プロデューサーの井上様に感謝の気持ちでいっぱいになります。

番組ロケのためご出席して頂けなかった鶴瓶師匠から贈られた米寿祝いのスタンド花。祝 米寿入院重朝様へ 「家族に乾杯」笑福亭鶴瓶よりとあります。



生花の前で、父・重朝



父・朝重の米寿祝い集合写真。総勢 38 名、賑やかでした。



こちらは、孫と曾孫だけで撮った写真。

亡き妻を想う



入来院 重朝

毎日、テレビを我が友として何することなく過ごしている。自分が米寿の年を迎えたということが何ともおかしく信じがたいことのように思える。

米寿というのは八十八才ということだから、ホントに88年の間、たいしたことをしたわけではない。ただウスボンヤリとすごしてきたのだ。ただ一つだけ、切実に思い感ずることはある。亡き妻、貞子のことだ。

オレの人生でただ一つ大事だったことは彼女とのエンを得たことだった。これは奇跡みたいなことである。

彼女とのエンを得たことが私にとってただ一つのタカラであった。その彼女もすでに亡い。

彼女のいない人生など、全く無に等しいのである。しかし、こうして生きながらえているのはなぜか。怖いナゾであるのだ。このままだとヒョットすると百まで生きるかもしれないのだ。

運命というものを考えざるを得ない。私はもの心ついた時から、この世の中は、何となく不思議だということを感じていた。丁度13才の時、少年期の生じる時、つまり中学生にあがるうという時、両肺肋膜炎から腹膜炎を発症し、九死に一生を得た。

二年間の養生を過ごし、新しい健康体を取りもどした。これは、一つの試練でもあった。つまり、生きる不思議さを体験したのだ。

今、米寿の年を迎えて、文字通りありがた

いと思う。身の回りは長女が私のメンドウを
みるため、嫁ぎ先から帰ってきている。これ
はいわばワガママであるが、めんどろだから
お互いに深い事情はきかず触れないようにし
ている。これも一つの人生の断面なのだ。

今日我が友、テレビをみるともなくみてい
たら、ホタル事情を映していた。そうだ、ホ
タルの季節なのだ。自然はゲンゼンと生きて
いる、決して裏切らない。

(炉ばたセイ談庵主)



第7回入来薪能『巴』(2010年8月28日)より

蛍にまつわる話二題



中山とし子

さつま町の川内川上流域は、ネット情報によると、ゲンジボタル数百万匹（！）が飛び回る蛍狩りの名所である。県内各地から車で来られ、蛍舟も出るそうだ。あの小さな光る昆虫の群舞に、なぜ日本人はこれほど惹かれるのだろうか。

今から三年前、親しい友人のNさんの案内で、市比野の小さな川、樋脇川の蛍を見に連れて行ってもらったことがある。水辺に沿って百匹は超えるであろう蛍の群れが、フラフリ、フラフリとはかなげに飛び回っていた。観光を目指してないので、近隣の方々が三々五々、車を川のほとりに停めて鑑賞して

いらっしやった。蛍はよく死者の魂がこの世に一時的に現成したものと称せられる。文学的に都合の良い情緒的解釈で、誰も心底信じているわけではない。しかし、私は最近、そんなこともあるかもしれない、と密かに考えている。

二〇〇七年五月二十六日、珍しく実家の敷地内に蛍が飛んでいるのを見た。私が子供の頃の昭和三十年代、蛍は当たり前のように田んぼの上を飛び回っており珍しくもなかったものだが、それからの二十年くらいで急激に減少した。昭和四十三年に関西に移動してからの三十年間、故郷に帰省する機会は少なく、残念ながら田んぼの上を蛍が飛び回るのを見ることはなかった。全国的に蛍の復活が試みられるのは、ここ二十年内外のことではなからうか。

ところで、二〇〇七年五月二十六日だが、二〇〇四年夏から続く両親の介護のため、私は入来に帰省していた。母親が二〇〇五年七月十九日に倒れたため、以後、二〇一五年までの約十年間、年に数度、一週間くらいの介護帰省を繰り返して二年目だった。

実はこの日、つい最近、車の事故で一瞬間に昇天してしまわれた同級生のH・Mさんのお家を宮之城に訪ね、仏壇にお線香とお菓子を供え、ひとしきりご主人様と思い出話をしていた。そして、その日の夕方、副田温泉場の銭湯亀の湯で、出て来られるご婦人と鉢合わせた。その方は田舎には厳しい雰囲気をお母様ではないか、とピンと来た。M子さんのお母様ではないか、とピンと来た。M子さんの実家は亀の湯のすぐ近くであり、子供の頃は、亀の湯でよくM子さんと一緒になったものだった。又、昔、母親がお世話になったこ

ともあって、私には親しい感情があった。その夜は特に口もきかず、銭湯から真っ直ぐレンタカーで中組の実家に帰った。帰り着いて車から降りると、荒れた菜園畑の隅の金柑の木に、何やら光るものがある。それが、すと動いたり消えたりする。かすかな光だが、もしかして、と心が弾んだ通り、やはり蛍だった。今にも地に落ちそうである。瞬間、「はら、M子さん！」と声が出た。私にはその蛍が亡くなったM子さんに違いないという確信があった。明日は温泉場のお母様に会いに行かねば、と思った。翌朝訪問すると、やはり、亀の湯で鉢合わせたご婦人だった。話をする、と、ボロボロ涙をこぼされた。

もう一つは、これも二〇〇七年七月十二日のこと。東郷園に入所していた母親を見舞った帰り、帰り道の二渡にある高校の同級生の

お墓参りをした。O・Zさんとおっしやり、以前から気になっていた。お墓を知っていたわけではない。住所からこのあたりと見当をつけて村の中に入って行ったのである。そして、無謀にも村の方に尋ね、こんもりとした墓地に上がっていった。

Oさん（以下Oさん）は高校一年の時同じクラスだったが、それだけである。しかし、一種天才的などころがあり、高校を卒業するまで私は関心を寄せていた。どういう風かという、まず数学の天才だった。数学だけが常にトップ。200点満点の190点前後。対照的に英語は無残な点数だとの噂だった。教科書は学校に置いて帰ると学友たちが吹聴する通り、かばんはいつもぺっちゃんこだった。着ている制服もバンカラ風で、帽子には穴が開いていた。自分でわざと開けたのかもしれない。

数学のできない自分にとって憧れであったが、それに加えて、彼はラグビー部であった。ラグビーというスポーツは男性的で、頭脳を使い紳士的でもあって、そこに心惹かれていた私は、時々自習すると見せかけて気づかれないよう運動場に面した生物室から練習風景をチラチラと見ていた。部活に明け暮れ、特に勉強する風でもないのに成績は常にトップクラスというのも心憎い。後で聞けば、試合の組み立てなどは、主将のかわりに彼がやっていたそうである。でありながら、彼にはある種の暗い影が付きまとっていた。無口であり、授業中教師から指されても答えない、こともあった。明らかに知っていないながら、教師が眼中にない風もあって目立たなかった。ある時、偶然、彼の暗さの理由を知った。それから、陰から見守らずにはいられなくなった。家庭的理由で進学が難しいという点で

は、私たちは同じ境遇だった。本を読んだり詩を書いたりばかりして担任に怒られまくっていた私と違い、卒業が近くなると、理数系クラスの学友たちは猛烈に勉強し、多分、Oさんの場合はどっちでも良かったのだろうが、二か月くらいの勉強で地方の国立大学に受かってしまった。それを人づてに聞いた私は「彼はもうこれで大丈夫」と安心して、祝福と共に、彼への心配を止めた。それからOさんのことを思い出すこともなく三十年が過ぎた。

五十歳をま近に控えたある朝、とても幸せな夢で目覚めた。なぜか、Oさんと寄り添い、何を語らうでもなく安心しきった心持ちでただ微笑んでいる夢である。その夢は結構長い時間続き、やがて眼が覚めた。目覚めた時、今確かにここにいたという実感があつた。三十年間思い出すこともなかった同級生が、ま

るで夫婦のように寄り添っており、お互い何かうなづいたりしている夢に、一日を何か得た気分だった。

次の日も同じ夢だった。Oさんは高校時代のように憂いや鋭さはかけらもなく、落ち着いて自信をにじませた態度だった。こちらも頼り切つて不安がない様子である。朝目覚めて、又も同じ夢だったことに不思議を覚えながら、どこかでラグビー部の顧問でもしながら数学の先生でもしていらっしゃるのかな、と思いを馳せた。その日も一日中、どこかに旅でもしたような幸福な気分で過ごした。

三日目、又も同じ夢だった。彼は幸せそうには見えるものの、影が薄くなつたように思えた。こうなると、私の中にちよつと気味の悪い憂いが浮かんた。何かあつたのではないか。夢で知らせようとしているのではないか。

四日目の夜、今晚も現れるだろうか、と思

いながら眠りについた。しかし、もうなかった。この日以来、私はだんだん不安を募らせた。何かあったのではないか。誰かに聞きたい気持ちで頭がいっぱいになった。五十歳の同窓会に帰ってある人に尋ねた。不安は的中していた。人々は彼のことについて話したがらなかった。それで、私も口を閉じた。高校時代に聞いた彼の境遇が思い出された。後で聞けば、大学はすぐ中退していた。今のようにな手軽に借りられる奨学資金制度はなかった時代だ。優秀な人物だったのに、悔しかった。

そして、二〇〇七年七月、どうしても胸が収まらない私は、お墓を探して見知らぬ墓地を登ったのである。割とすぐにお墓は見つかった。夢を見たあの時だったのではないかと危惧していた予想とは違って、かなり早い三十代に亡くなっていた。何も持たずに来て

いたので、キャンデーを二個墓石の上に乗せた。その晩、八時ころだったか、外に出ると、かなり大きな蛍が縁側の前を飛んでいた。

「ああ…、Zちゃん…」と、つい、日ごろ学友たちに呼ばれていた呼称で呼びかけた。疑いもなく彼だと思われた。その蛍が逃げもせず近づいたりするので、両手で捕まえた。両手の中で、点いたり消えたりしている。放しなくなると、家の中に持ち込んだ。蛍は座敷をあちこち飛び回っては、柱や畳に止まる。

何か伝えたいことがあるように感じて、言葉少なに私も話しかけた。そして、部屋に入れたまま寝床に入った。が、やっぱり可哀そうになって外に放してやった。翌年、佛花とお線香を供えに再びお墓に参ったが、その夜蛍が来ることはなかった。Oさんもこれで納得したのかもしれないが、私も気持ち落ち着いた。

最後の蛍の話は楽しい。二〇一七年九月、マレーシア旅行をした。クアラルンプールに移住した高校の同級生が遊びに来なさいと言ってくれ、様々な計画を立ててくれた中に「蛍鑑賞ツアー」が入っていた。クアラルンプールの近くのセラングール川では、一年中蛍の群舞が見られるという。蛍好きの日本人に人気があり、ツアーを組んでやって来るのは、ほとんどが日本人観光客たそうである。はかなく美しい蛍の生態に文学的付加価値を見出した日本人が、一年に一時期しか見られない日本の蛍に物足りず、ここでその欲求を満たしたいとやってくるわけである。友人と私は、友人の手配で雇ったインド系マレー人のガイド、スグさんの運転するタクシーで、昼間は周辺を観光しながら、夕食は川のほとりの中国系レストランでたっぷり中華料理を食べ



クアラルンプールの「蛍鑑賞ツアー」にて

ながら暗くなるのを待った。

船着き場まで行くとライフジャケットを貸してくれ、音のしないボートに十人くらいずつ乗って、広い川の中に漕ぎ出す趣向である。

その頃には、もう大きな木々の梢という梢に蛍の光が点滅するのを見ることができると言える。

川辺と言う川辺には、ぎっしりと、と言った方がぴったりくるくらいに大量の蛍が、小枝に付いて光を放っているのが見える。最近日本では希少昆虫である蛍の登場に、私は、あつちの岸、こつちの岸と、一匹も見逃すまいとする勢いでキョロキョロした。真っ暗な中に、蛍の光だけを頼りに小舟は静かに川岸を移動する。手を伸ばせば捕まえられるほどの近さ。感動して、つい感嘆の声があちこちの乗客から上がる。

私たちのすぐ前に、若いカップルが行儀よく坐っていた。後で聞けばインドネシアとミャンマーからの留学生だということであった。船頭さんが川岸に止まってくれた時、その二人の間に一匹の蛍がスーと飛んで来て、二人の肩のあたりや頭の上や膝の間を歩き来ると周囲の乗客も共に楽しんで、おー、おー、と歓声を上げた。二人は、はしやぐでもなく慌てるでもなく、相手を尊重しながら照れ合っている。その清楚な行動に、私は蛍以上に感動した。蛍が取り持つ縁で、この二人の留学生には幸せな未来が待っているに違いないと思われた。

(エッセイスト)



西郷読みの西郷知らずを問う



宮下 亮善

昨年の4月末か、5月はじめの頃だったと思う。朝の7時過ぎ電話が鳴った。電話の主は、赤崎元鹿児島市長であった。

一昨年は、西南之役140年にあたり、『西南之役官軍陸軍恩讐を越えて』の慰霊法楽を、南洲墓地にて行った。西郷隆盛公曾孫西郷吉太郎氏と大久保利通公曾孫大久保利泰氏を東京よりお招きし、歴史的握手をしていただきました。ついで、昨年は、大久保利通公命日（明治11年5月14日）前の5月6日に、『西南之役官軍薩軍恩讐を越えて』慰霊塔の墓前で大久保利通公玄孫大久保洋子様を招き、

その法楽を行った。

この法楽についての赤崎元鹿児島市長からの電話であった。「和尚、素晴らしい事をされる。実は、高見橋の大久保銅像を建立する時の秘話がある。その事を、和尚に話しておく」との事。「実は、東京の方から、なぜ、鹿児島の人たちは、大久保銅像を立てないのかと、再三の話が、当時の鎌田要鹿児島県知事にあつたそうです。それで、鎌田知事は、当時の鹿児島の名士を集めて、そのための会合をもたれて、居並ぶ方々に大久保公の銅像を建立しようと考えておりますが、皆様方のご意見を伺いたいと、話を持ちかけられましたが、誰も発言がなく、やむなく、赤崎君、もし、銅像を立てるとすれば、鹿児島市のどこかに建立するのだから、君はどう思うかと問われたとの事。」そこで、赤崎元市長は「はい、大久保公には、鹿児島の人々は、いろいろ

ろとご批判もあります。私も当然その事は存じておりますが、この大久保公の銅像が建立されて、一番喜ぶのは、西郷さーあじやなかんどかいと、ですから、私個人としては建立したいですね」。「ああー先生いい殺し文句ですな」と。小生、思わず涙腺が緩み涙声で聞いておりました。「和尚、この事を、話してきましたくて、電話をしました。」との事。本当に、素晴らしい秘話。まさに、赤崎元市長の遺言となりました。

昭和64年（1979）大久保利通公没後100年を記念し、中村晋也先生の手により、甲突川左岸高見橋のたもとに建立されている。以来、この秘話を機会あることに、お話ししております。ある人が、「今時、珍しくいい話ですね、本当に、西郷さーあなら、そのように思われるでしょう。是非、これからも、多くの人々に話して下さい」と。人を思いや

る心、惻隱の情、今日、忘れかけている『ものあわれ』を、思い知る秘話です。

大久保利泰氏より、電話をいただき東京の霞会館にお出下さい。との事、ここには、全国から大久保公のファンが参集されておりました。そこで、この秘話を語りました。皆さん感激の面持ち、今日は参加して良かった。帰り際、「和尚さん、ありがとう、本当に素晴らしい話を聞かしていただきました」と、口々に握手を求められて会場を後にされておりました。その中に、数人のグループがあり、その中のある方が「和尚さん、私どもは、福島の郡山から来ました。私たちの住む地域に『大久保神社』があります。毎年、9月1日は、『大久保神社水祭り』を行っております。是非、和尚さん、お出下さい」と誘われました。『大久保神社がある』不覚にも、その存在をはじめて知りました。あの『安積疎水、安



明治政府初となる国営事業・安積疎水の完成

明治政府初となる国営事業・安積疎水の完成と大久保利通

『積開拓』事業に、多大の貢献をされた大久保公の恩顧に報いるために建立されたのであった。明治の近代国家建設の重責を一身に受け、殖産興業、農業の開拓、士族の授産事業として、自らも取り込もうとしていた矢先の事、その先駆的試みに、国家予算の3分の1を費やして推進し、明治15年に完成した。

江戸時代の昔から、この安積地域は、西に水は流れても、東に水は流れないといわれ、あの、猪苗代湖の水を、この地域に引き込む事が、永年の念願であったといわれていました。その結果、130キロにおよぶ安積疎水となり、8500町歩の原野が水田に変わり、この開拓事業が、現在の郡山市の基礎となったといわれています。まさに、霞会館で声をかけた方が、大久保利通公顕彰会会長鈴木英雄氏であった。昨年の、9月1日、大久保神社水祭りに参列させていただきました。な

んと、129年ぶりに鹿児島からの参列があったとの事、鹿児島の地元では、『西郷を裏切った大久保は許さん』と、140数年たつても、非難される人々が居ますが、ここでは、神様として、尊敬されている。同じ鹿児島県人として、複雑な思いで参列させていただきました。今年、丁度、創建130年、その記念に『神殿灯籠』を2基（高さ2.4m）を、奉納させていただきました。これで、大久保公や地元安積の方々に面目が、たつたのではないかと内心喜んでおります。この9月1日の『大久保神社水祭り』130年祭に、鹿児島から参加致します。

「大久保利通公は、西郷隆盛、木戸孝允とともに、維新の三傑といわれ、版籍奉還、廢藩置県、その他の改革政治のすべてに関与した。参与・総裁局顧問・内国事務局判事・大蔵卿などを歴任した。

1871年（明治4年）11月欧米派遣全権副使となり大使岩倉具視らと欧米を巡遊してとくに経済制度を視察しその富強の基づくことを知り、1873年（明治6年）5月に帰朝した。同年10月内地の急を唱えて参議となり所謂『征韓論』の決裂により西郷と袂をわかつた。

爾来参議兼内務卿として廟堂の勢望を一身に集め、維新草創期の改革を断行した。地租改正事業や家禄公債制度・勸業施設・地方自治制度などに功績をのこした。多くの経済政策のほか地方官会議・府県会開設など、すべて彼の抱く富国強兵への熱烈な念願から出たものであった。

しかしながらその独裁的強力政治は民間政客・不平士族らの嫉視を買い明治11年5月14日紀尾井坂で石川県士族島田一郎らの凶刃に斃れた。『為政清明』が彼の処世訓であ

ったが、その死後には80000円の巨債が残されたという。」(原口虎雄著より引用)

大久保公は国家目標を「殖産興業」による富国政策と定め、戊辰戦争で荒廃した東北の復興と士族授産対策を重視した。1876年(明治9年)、明治天皇東北巡行に先立ちして視察した安積の地で、「わが国の富強の基はこの地に在り」と、上申書を右大臣岩倉具視に送っている。凶刃に斃れるその朝、福島県令山吉盛典の訪問を受けていた大久保公は有名な30年計画(濟世遺言)を語り、安積疎水事業などに細々と注意を与えていたという。戊辰戦争で敵対した旧幕臣さえも「明治唯一の大宰相」と称賛したという。安積疎水事業は東北復興の核心であり、その無念さはいかばかりかと察するにあまりある。

昨年、南洲墓地の恩讐を越えての慰霊塔の墓前で、大久保利通公の慰霊法楽を5月6日

に執り行うとしたら、狂信的西郷崇拝者たちの妨害を受けました。南洲翁墓前で、前代未聞の大音響を流し、鹿児島市当局の許可もななく違法な恣意行動。自己の意に添わないものは排除するというファシヨ的行動に呆れるばかりでありました。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己れを尽くし人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。南洲翁『敬天愛人』の教えです。西郷崇拝者がもつとも心掛けねばならない遺訓かと思いますが、実に見苦しく天にも恥じない行動。

『西郷を裏切った大久保は許さぬ』ただこの一言をもって、140数年もの間、恨みを続け未来永劫に恨みを語り継ごうと言うのでしょうか。確かに、西南之役は親兄弟が竹馬の友が、血涙山河を濡らす悲劇的な戦いではありません。『征韓論』で袂をわち敵対した

ことは、返す返すも残念な事であります。現在においても国論を二つにわける国家的政治的懸案がありますし、これからもこのような問題は消える事はないと考えられます。歴史だ、政治だ、経済だといっても、すべては人間のなせる業。その人間は良い心、悪い心を持ち合わせている。これら全てを含めて歴史を刻んでいくわけであれば、どこかで『水に流す』こともまた、人間の叡智という事になるのではないかと思案致します。『西郷を裏切った大久保は許さぬ』それならば、官軍・薩軍の戦いに何ら関係ない人々が、たまたま戦場となったために田や畑を荒らされ家を焼かれ、あまつさえ薩軍の命令に従わなかったために惨殺された無垢の恨みは誰が晴らすのでしょうか。そのために没落した人々もいたことを、それこそ当事者は未来永劫に忘れてはならないという事も言えます。『つらしとて、恨みか

えすな我人に 報い報いて果てしなき世ぞ』
『回向には 我と人とを隔つなよ 看経はよし してもせずとも』日新公の『いろは歌』
今に光るものがあります。

私たちは歴史から何を学ぶというのでしょうか、西郷さんや大久保さんの何を学ぶと
いうのでしょうか。恨みを語り継ぐことを学ぶのでしょうか。『論語読みの論語知らず』とは、すなわち『西郷読みの西郷知らず』『大久保読みの大久保知らず』に通じるのです。『敬天愛人』『為政清明』この教訓こそは、私たちが心して学びその理想社会実現のために尽くす事こそが、先人に報いる事であると思えます。

あらためて、明治維新150年をふりかえる時、その維新の志士たちは何のために戦い、何に命をかけてきたのか、その意志をどのよ
うに次の世に語り継ぐのか、後事を託された

者が考えなければならぬ事だと思ふ。

平成から令和へ時代は大きく変わり、この2600有余年万世一系の皇室の存在をどのように受け止めたらいのか、欧米列強の押し寄せる植民地支配に対して、国を挙げての抵抗運動であったわけで、公武合体か尊王攘夷か国内は対峙し、多くの尊い命が失われた。すなわち、維新の最大の意義は欧米列強の植民地支配に対抗する事と、皇室を護ることにあったといえます。何故なら、欧米列強の国々は一神教的価値観を有する国々であれば、一つの国に二人の国王の存在は認めず、一つの国に二つの宗教は認めない。当然彼らの信奉する価値観を強いる事はあきらかである。まさに、2000年来争う中東問題がそれを証明している。150年前に列強の支配を許す事になっておれば、皇室は廃絶され元号も無きものになっていたのであろうと思われる。

藤田東湖先生の『正氣の歌』に、『死しては忠義の鬼となり極天皇基を護らん』まさに、天地の有らん限り皇室を護るの氣概を吐露している。西郷南洲翁もその『獄中感有り』に、『朝に恩遇を蒙り夕に焚阮せらる。人世の浮沈は晦明に似たり。縦い光を回らさずとも葵は日に向かう。若し運を開く無くとも意は誠を推さむ。洛陽の知己皆鬼となり。南嶼の俘囚独生を竊む。生死何ぞ疑わん天の附与なるを。願わくば魂魄を留めて皇城を護らん。』たとえ、命は亡くなくても、魂だけはこの世に残し皇室をいつまでも護りゆかんと、捕らわれの身でありながらもその氣概を吐露している。大楠公『七たび生まれて国に報いる』の尊皇の思いに通じるものがある。その生きざまを『楠公の図に題す』として『奇策明籌謀る可からず。正に王事に勤むる是真儒。懐う君が一死七生の語。此の忠魂を抱くもの今在

りや無しや。』楠木正成湊川の戦いにおいて、30万の足利軍にわずか700騎で負けを承知で挑み討ち死にし後醍醐天皇に忠義を尽くしたこれほどの人物が今の世に居るかどうか、南洲翁自身に問うている。

まさに、『正氣時に光りを放す』藤田東湖先生明治の世に居ましますれば、維新の志士たちも、その『正氣の歌』列したであろうことは容易に想像できる。正氣の歌とは、永い国の歴史において、国の栄枯盛衰、危急存亡の秋に必ず『正氣』を持った人物が現れ国難を救ったという歴史を紐解いたもので、維新の志士たちのバイブル的のものであった。

南洲翁『私学校綱領』

一 道同じく義協ふを以て暗に集合す。乃ち、益々その理を研究し、道義においては一身顧みず、必ず踐行すべし。

二 王を尊び、民を憫れむは学問の本旨なり。乃ち、此の理を究め、王事民義に於いては一意難に当り、必ず一同の義をたつべし。

『私学校の職分』

蓋し学校なるもの善士を育する所以なり。

一 郷一国(薩摩)の善士ならず必ず天下(国家)善士たるべきを欲すなり。

南洲翁が後世に期待する心情が託されている。西南之役でその思いは瓦解したとはいえ、その志しを継ぐことこそが、後事を託されたものの成すべき事であり、決して『西郷読み』の西郷知らず』であってはならない。

みずからを『土中の死骨』として、徹底的に蔑み一切の抗弁もせず、城山の露と散ったその心情と、心ならずも西郷を死に追いやった慚愧の念に苛まれ、警護もつけず島田一郎らの凶刃に倒れし『紀尾井坂の変』を思う時、両雄の生死をも超越した絆の深さは到底凡人

の考えのおよばざるところである。西郷がどうの、大久保がどうのと、どれほどの見識と度量があれば批判できるものか、否、批判できるものではない。

『怨を以て怨に報ゆれば怨は止まず 徳を以て怨に報ゆれば怨は即ち尽く』

恨み辛みの世の中に有為の人材は育たない。何と空しいことか。

《歴史REAL『敗者の明治維新』子孫たちが語る西郷隆盛》抜粋

西郷隆太郎（南洲翁玄孫）

くたしかに二人の最後はいろいろありましたが、今は大久保家と西郷家は親族になっていて、実際、大久保家と隆盛系の血が入っている。僕の兄貴分みたいな人もいます。

それと、今年（2017年）の9月23日、隆盛の命日の前日に、西南之役で敵味方に分かれてしまった鹿児島の人々を結び付けよう

と、「西南之役官軍薩軍恩讐を越えて」という慰霊法楽を鹿児島南洲墓地でやっただけです。慰霊塔を建てて、除幕式で官軍の遺族代表として利通直系、ご当主の大久保利泰さん（大久保利通曾孫）と、父（四代目当主西郷吉太郎氏）が薩軍の遺族代表として、それぞれスピーチし、握手をしました。もちろん、親族ですのでもっと付き合えばよかったのですが、このように表にお二方が出られたのは初めてだったんです。大々的にNHKのニュースになったのですが、まだ一部には遺恨が残っている方もいるでしょうし、ほんとうに悲しい戦いだったけれども西南戦争から140年経ち、慰霊碑を建てたことによって、少なからず英霊たちが仲良く天国で過ごされることができるとなりましたのではないかなど。とても素晴らしい慰霊法楽でした。く



(天台宗大雄山南泉院住職・
西南之役恩讐を越えての会事務局長)

『西南之役官軍陸軍恩讐を越えて』の慰霊塔前にて、
西郷隆盛曾孫・西郷吉太郎氏（向かって左）、大久保
利通曾孫・大久保利泰氏（同右）。2017年9月23日。

昨夜みた夢

入来院 重宏



僕は、毎晩睡眠中に夢を見ます。まず間違
いなく毎晩見ます。小さい頃に見た夢もいく
つか覚えているので、幼少時より多分間違
なく毎晩夢を見続けています。

強烈な夢やとくにおもしろい夢を見た朝
は、忘れないうちに夢の内容をメモしていま
す。早朝（4時とか）にトイレに閉じ籠って、
ここ数年はフェイスブックに書き込みそのま
ま投稿しています。

初めて夢をメモしたのは高校時代です。非
常にグロテスクであまりにも不気味な夢だっ
たので、『この夢は何かとても重要なことを暗

示しているのではないか』と勝手に思い込ん
で忘れないうちにとメモしたのです。

その日に見た夢はこんな夢でした。なぜ夢
の中の僕がそのようなことをしているのか、
その理由までは覚えていませんが、夢の中で
僕は（中型の）犬の後ろ足二本を右手で掴ん
で（高校の）校舎に何度も叩きつけて殺すの
です。

自分の中に自分の知らない非常に野蛮な
気質があり、そのうちに僕は何かとてもな
いことをしでかすんじゃないかとしばらく
悶々と悩んでいました。

あの恐ろしい夢の日から40年以上経ち
ますが、とりあえず今のところ僕は、警察沙
汰になるような危険な行為をすることもなく、
実に平凡に生きてきました。余計な心配だっ
たということでしょう。

見る夢は毎晩違います。多くの場合、夢の

中の僕は中学生か高校生です。そしてほとんどの夢がとても変です。芸能人等の有名人が出てくることもしょっちゅうです。

夢を50年以上見続けてきて、僕が夢について言えることは、「過去に経験したこともなく、見たり人から聞いたりしたことも、日中ぼんやり考えたことすらない不思議な世界が自分の頭の中で繰り返される。何か無意識の中の重要なことを示唆しているわけでもなさそうで、その後の僕の人生に全くと言っていいほど影響を及ぼさない。要するに僕の見る夢は僕を含めて誰にとっても無意味で人畜無害。だけど底知れず奇妙で面白い」こんなところでしようか。

ここ数年見た夢の中で、いくつか面白い(と自分が勝手に思っている)夢を紹介します。

①ビートたけしに叱られた夢

ビートたけしに「親不孝者」と言われ、青いプラスチックの大きなたらいでお尻を10回叩かれた。

あまり痛くなかったけど、感動して泣いた。嗚咽という感じでもあまり涙は出なかったけど。気がつくくと足元に160, 080円と書かれた封筒がおいてあった。

場所は北海道の居酒屋で、たけしさんの命令で電池を冷蔵庫にしまっているときに、たけしさんに「ちよつと来なさい」と呼ばれて叱られたのだ。

(自宅トイレで書いています。かみさんが早く出るようにと怒っている。夢でも現実でも怒られてばかり 2012. 6. 8)

②なぜか姫の姿の僕

僕は帆船に閉じ込められていて、なぜか姫

だった。(赤い着物を着ていて姫みたいだった。)突然ガタガタと音がしたので驚いて、僕は「誰じゃ、侍従長大慈か？」と叫んだところで見目が覚めた。

実は「大慈」は当て字で、「ジジユウチョウダイジカ」と叫んだ。侍従長大慈って誰?!
(2012. 8. 30)

③大島優子と結婚していた僕

僕はたぶん20歳位で家族と暮らしていた。大島優子はうちに居候していて、僕と彼女は結婚していることを家族に内緒にしていた。

彼女は僕の兄弟なのか従兄弟なのか分からないけど、小さな子供たちと一緒に寝ている、夜中こっそり僕の部屋に来ようとすると、途中で兄や兄の嫁さんにつかまって僕の部屋まで辿りつけない。

仕方がないので、二人で家を出て暮らそうということになって、誰も住んでいないはずの親戚の家を見にいった。

誰もいないはずなのに何故か26年位前に亡くなった叔母さん(まだ若かった)が家を掃除していて、「1階は若い男性に2階は保育所に貸しているから空いている部屋はない」と言う。

僕たち二人は困って、僕が大島優子に「諦めて世間に公表して堂々と一緒に暮らそう」と言うと、彼女は「貴方は、最低の男じゃないから人に知られても恥ずかしくないけど、私やっぱりまだアイドルでいたい」と言う。僕は「じゃあ別居して月に一度くらいこっそり俺に会いに来るか？俺だって若いんだから外に女作るかもよ」と最低の男丸出しの台詞を言ったところで目が覚めた。

ちなみに、僕はAKB48とか大島優子と

か全然興味ありません。(2013.6.27)

④おぶくろを思つて泣いた

僕はまだ随分と若く、新宿ゴールデン街の飲み屋みたいところで飲んでいた。一緒にテールを囲んでいるのはお婆さんのように歳をとった戸川昌子と若い石原慎太郎と、もう一人はやっぱ若い男で知らない奴だった。戸川昌子が「私は若い頃、4歳の娘を死なせてしまった」と言つて泣いていた。僕は深く同情して、心の中で『なんで俺はこの女性が好きなのか今やっと分かった。この女性は死んだお袋にそっくりだからだ』と考え、そう思うと死んだ母親に会いたくなつて、とめどもなく涙が溢れてきた。

そこに石原慎太郎が、「お前のその涙はこの国の将来を憂いてのものだろう。お前は予知能力があるから、きつと何か見たんだろう。

お前が今見たことを皆に話して聞かせるがいい」と言った。

僕は『俺には予知能力なんてない。俺は死んだお袋に会いたくて、気がついたら涙が出ただけだ』と言つた。石原慎太郎がひどくがっかりした顔をしたところで目が覚めた。(2013.10.13)

⑤ポール・マツカートニーが叔父さんだった

老人ホームに叔父さんを訪ねたら、叔父さんは疲れたポーズで、だらしなく椅子に座つてお米をゆっくり研いでいた。何故か叔父さんはポール・マツカートニーだった。ポールがつまらなそうに椅子に腰掛けてたらだらとお米を研いでいる姿が面白いので写真を撮つてるところで目が覚めた。

今まで、いろんなポールを見てきたけど、

おひつに右手を突っ込んでゆっくりお米を研いでるポール・マッカートニーは初めて見た。しかも、僕の叔父さんだなんて！なんて素敵なんだろう。

叔父さん（ポール）のつまらなそうな顔を見て夢の中の僕は思わず吹き出してしまった。
（2013. 1. 27）

⑥デュアン・オールマンが生きていた。

夢の中の僕は中学生か高校生くらい。押入れの中からギターの音が聞こえてくるので襖を開けるとデュアン・オールマンがギター（レッドサンバーストのレスポール）を弾いていた。

デュアンに（日本語で）「生きていたの？」と聞くと、デュアンは（日本語で）「40年隠れて生きてきた」と言う。

僕も、『デュアンは多分きつとどこかで生

きている』とずっと信じていたそうで「信じていると現実になることが証明された」涙を流して喜んだ。

デュアンが牛乳を飲みたいというので、1リットルの紙パックを買ってきて渡そうとしたら、手から滑って落ちてパックが破裂。「俺は、つくづく牛乳には縁がないな」とデュアンが笑うので僕も笑った。

不思議な感動を呼び起こす夢だった。
（2018. 5. 19）

⑦苦い味が分からない

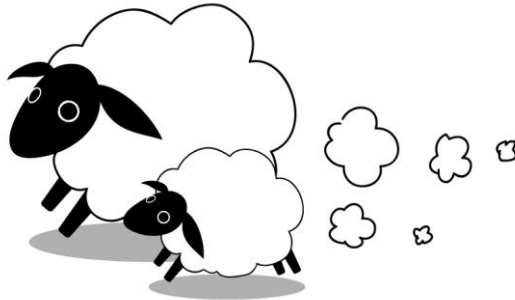
夢の中の僕は高校生くらい多いので、それも不思議なのだけど、今見た夢の中の僕は小学校1年生くらいの子供だった。なんの授業か分からないけど、画用紙がみんなに1枚ずつ配られていて、先生が「苦い味」というのはどんな味か書いてみよう」という。

僕も含めみんな何て書いていいのか分からなくて困っていると、先生は瓶を取り出して「この瓶の中の粉は苦い味だから、これを舐めてみよう」と言った。そして僕の手のひらに粉をのせた。僕はその粉を舐めてみたがあまりの苦さに「べっ」と吐き出してしまった。

先生は「さあ、みんな粉を舐めて苦い味というのがどんな味か画用紙に書いて、先生のところに持ってきてください」という。僕はあまりの苦さに吐き出してしまったので全く味を覚えてなくてやっぱり何も書けない。画用紙を前にしてどうしていいか分からず泣き出してしまった。

気がつくくと周りのみんなも同じように困って泣いていて、なんだかホッとして目が覚めた。(2018. 5. 21)

(キリン社会保険労務士事務所代表)



日本の近現代史から何を学ぶか

― 白井聰の『国体論 菊と星条旗』
をめぐって



梶原 宣俊

一、はじめに

― 国体論の衝撃と平成の終焉

平成三〇年の六月、白井聰の『国体論 菊と星条旗』を読んで衝撃を受けた。私は、昭和二十一年の六月生まれで、大学生のころから、自分が生まれる一〇か月前までであった悲惨な大戦争のことが気になり、近現代史の勉強を始めた。その過程で、戦後の詩人・思想家吉本隆明に出会い、共感を覚えその著作をすべて読んできた。吉本は戦前、軍国少年として

戦争体制に丸ごとからめとられたことを戦後、徹底的に反省し敗戦（敗北）体験を深化させることによって、独自の戦後思想を構築してきた。私はその難解な思想を少しでも理解したいと思い、二十数年格闘し、平成一六年、五八歳のときに『吉本隆明論―戦争体験の思想』（新風舎）を自費出版した。吉本が戦争体験から体得した思想を、少年期青年期の自己形成も含め明らかにし、三つの思想として論じた。それが、大衆の思想（大衆自立主義）、国家の思想（共同幻想）、体験の思想（体験実感主義）である。

吉本は二〇一二年、「第二の敗戦期」（春秋社）で、日本は初めから独立を放棄していると指摘していた。その吉本も二〇一二年に没して以来、久しぶりに出会った魅力的な人物が白井聰である。白井は、一九七七年生まれの若手新進気鋭の学者評論家として『永続敗

戦論―戦後日本の核心』(二〇一六講談社)で注目を浴びてきた。

白井は、この書で、戦後日本の特殊な対米従属の在り方を解明し、敗北が持つ意味を曖昧化すること、敗戦の否認を続けるために際限なく米国に従属を続ける親米保守派支配体制を「永続敗戦レジーム」と呼んだ。

吉本は自らの敗戦・敗北体験にこだわり続け、白井は、戦後生まれとして敗戦、敗北の歴史にこだわり続けているのである。そして、今回は「国体」というキイ概念を用いて、明治から現代までの歴史を明快に分析している。私は「国体」という言葉は、戦前までのもので、現在では死語だと考えていたので意外な思いで読み始めた。しかし、読み進んでいくと現在にいたる近現代の歴史が生き生きと蘇り、あらためて近現代史を学ぶ大切さを痛感した。白井は「現代日本の入り込んだ奇怪な

逼塞状態を分析・説明することのできる唯一の概念が国体である」と述べ、菊と星条旗の結合を「戦後の国体の本質」として、「戦後日本の特異な対米従属が構造化される必然性の核心に位置するもの」として分析している。

私は、これまで漠然と対米従属をとらえ、肯定と批判が混在していた。白井は「国体の歴史」を戦前と戦後の二度にわたる「形成・発展・崩壊」の過程としてわかりやすく論じている。

そこで、彼の「国体論」を契機として、再度私なりに近現代史を読み解き、同時に改めて自らの体験的戦後史を振り返ってみたい。

二、白井聡「国体論 菊と星条旗」の概

要

白井は、国体論を今上天皇のお言葉から始めている。

二〇一六年八月八日、テレビで今上天皇は

生前退位を表明された。

白井はこれに衝撃を受ける。私は、白井ほかに衝撃を感じなかったが、今なぜ「退位なのかいぶかしく感じていた。

白井はお言葉の背景を、安倍保守政権の改憲問題や天皇は「祈っているだけでよい」という「日本会議」の発言に求めている。安倍政権は天皇の決断・発言に対して、宮内庁長官を更迭し辞任に追い込んだ。天皇は、これまでの生き方を全否定する内容に強い不満を持たれたという。

白井は、お言葉の裏に、戦後民主主義の破壊・空洞化に対する危機感と象徴天皇制の危機を読み取る。今上天皇は、象徴としての役割を果たすこととは、「全身全霊をもって国民の平安を祈り、戦争や災害に傷ついた人々や社会的弱者を励ますために東奔西走しなければならぬ」と考えておられる。この考えは、

私たち国民もおそらく同じ考えであり、私も、天皇の沖繩訪問等で、あの敗戦の犠牲者に対する深い思いを感じ取ってきた。国民が戦争体験を風化させる中で、天皇は戦争体験にこだわり続けている姿に感銘を受けてきた。それを、「祈るだけでよい」などという考えが保守自民党にあったとは驚きである。

白井はさらに、親米保守支配層にとって精神的権威は天皇からアメリカにスライドしていると指摘している。そして最後に「世界史



白井聡著「国体論 菊と星条旗」
(2018年、集英社)

上でも稀な、途轍もなく奇妙な敗戦、すなわちどのような敗北を喫しているのか敗者自身が自覚できないことよってそこから脱出できなくなるような異常な敗北を経験していることが表面してきた」と、「永続敗戦論」以来の主張を述べている。

もともと私は戦後生まれで、天皇という存在はあまり意識してこなかった。美智子妃との結婚式も外国のテレビのように見ていた。天皇制はあってもなくてもどっちでもよいと考えてきた。ただ、天皇が災害や、沖縄をはじめとする戦争の爪痕を訪問され、戦争と敗戦体験を忘れずに大事にされ続けておられることは印象的であった。

大学生から、近現代史を学ぶ過程で、日本人にとって「天皇（制）」とは一体何なのか、敗戦時に死守しようとした「国体護持」とは一体何なのかを多少考え始めた。

白井は、天皇のお言葉を契機として、すでに死語となってしまう「国体」という概念をよみがえらせ、戦後も形を変えて現在まで生きていることを、近現代史を踏まえて論証する。

近現代史を、前半後半に分け、さらにそれぞれを三期（国体の形成期・国体の相対的安定期・国体の崩壊期）に分け一五〇年の歴史を反復する国体の歴史としてわかりやすく年表化し論じている。

白井は近代前半、明治維新から敗戦までの七七年を三期に分けている。

第一期（明治維新から一九一二年明治天皇没まで）を天皇に統帥権を与え、天皇絶対主義、「天皇の国民」という国体の形成期、第二期（一九一三年の大正政変から一九二八年三・一五事件、張作霖爆殺事件まで）を「天皇なき」国体の相対的安定期、第三期（一九

三一年満州事変から一九四五年敗戦まで)を「国体の崩壊期」として論じている。そして、これをそのまま戦後の歴史にも当てはめているのが白井の慧眼、新しさである。その視点、前著からの主張である、米国主導、米国追従による象徴天皇制の存続である。米国は象徴という形で天皇制を残した方が統治しやすいと考え、天皇の戦争責任を不問に付し、新憲法を作成した。日本国民は、天皇の戦争責任を問うことなく、悲惨な戦争はもういやだと痛感していたから、この戦力を放棄した平和憲法を支持した。白井の洞察は、日本の支配層が米国追従により「敗戦」の事実を緩和してきたという点である。かくして、親米保守派(自民党)が戦後政治を支配することになった。この「親米保守」と「反米革新」の対立というねじれ現象についてはすでに、加藤典洋が一九九六年に「敗戦後論」(講談社)

で指摘していたことである。国体の崩壊と平和民主主義は左翼革新の支持することだから、本来、「親米革新」であるべきだし、国体護持派である右翼保守は「反米保守」であるべきだったのにねじれている。さらに、ジョン・ダワーも「敗北を抱きしめて」上・下 岩波書店(二〇〇一)で、戦後社会の矛盾とねじれは、日米合作、共犯であったことを論証し、アメリカが天皇制と官僚制を利用して強権的に民主革命を行ったことを指摘していた。

この複雑なねじれが、戦後日本の不可解さであり、白井が「永続敗戦レジーム」と呼び、今回の「国体論」につながっている。日本人が敗戦の事実を直視し、その教訓をいかしてこなかったためにいまだに敗戦が続いているというのが白井の逆説的表現「永続敗戦論」である。国体論は、その延長線上にあり、戦後も三期に分けて論じている。同じ国体では

紛らわしいので、戦後は「新国体」として表記した。

第一期は一九四五年の敗戦から一九七五年の連続企業爆破事件までで米国占領が終わり、米国支配の象徴天皇制がスタートし、六〇年安保闘争を弾圧し、高度経済成長を遂げた時期である。

白井は、この「新国体の形成期」を「アメリカの日本」と称し、明治期の「天皇の国民」と対比させた。国民の安保反対闘争が敗北し、米国と親米政府が支配権を確立した時期である。

第二期は一九七六年のロッキード事件から一九九三年のバブル崩壊までで、「新国体の相対的安定期」で「アメリカなき日本」と名付けた。日本が「ジャパンアズナンバーワン」とおだてられながら、バブル崩壊に突き進んだ時期である。

第三期は一九九五年の阪神淡路大震災、オウム真理教事件から二〇一九年現在までである。「新国体の不安定期、崩壊期」と称し、「日本のアメリカ」と呼んでいる。この「日本のアメリカ」という意味が多少わかりにくい。

白井は、「国体の弁証法」と称して、「日本の助けによって偉大であり続けるアメリカ」の時期であると主張しているが、私には、日本の助けによってアメリカが偉大であり続けたとは思われない。さらに、「日本は独立国ではなく、そうありたいという意思すら持つておらず、かつそのような現状を否認している」。「本物の奴隷とは、奴隷である状態をこの上なく素晴らしいものと考え、自らが奴隷であることを否認する奴隷である」と述べている。なんとも辛辣な表現である。かくして「菊と星条旗」の統合による戦後の支配体制が、現在崩壊の危機にあると白井は指摘しているが、

私には多少希望的観測のように思える。戦後日本を米国支配と象徴天皇制の合体である「新国体」と喝破した慧眼には敬服するが、それが崩壊期にあるとはとても思えない。

米国のフーバー研究所で働き、GHQの秘密資料を分析し、ネットで情報発信を続けている西鋭夫もまた、GHQ・マッカーサーが敗戦後の日本をアメリカの都合の良い国にするために、日本人の憲法草案を無視してアメリカの憲法草案を採用したことを指摘している。そして欧米国家が、天皇の戦争犯罪の責任者として処刑することを主張する中で、天皇制を維持した方が占領政策を実行しやすいと考え、東京裁判から除外したという。さらに現在、米国トランプ大統領は世界の憲兵であることを放棄し、アメリカファーストを実行しようとしている。世界はそれに翻弄されつつある。その米国に日本の安倍政権は北朝

鮮問題をはじめ、憲法改正（自衛隊明記）等ますます米国追従を深めようとしていると指摘している。

私は、たとえ米国主導の憲法、戦後体制であろうと、良いものは育て良くないものは、国民の力で変えていくべきだと思う。また、政府が天皇のお言葉を白井のように深く理解することはないだろう。そうして「象徴天皇制」だけはこれまで通り存続していくだろう。第三期は、「新国体の崩壊」どころか更なる強化を目指しているように思える。白井は、今上天皇のお言葉を過大評価しているようにも思える。ただし、その「新国体の強化」が崩壊を内包しているとは言えるかもしれない。

前半の国体崩壊は敗戦によるものであった。新国体の崩壊はどのようにしておこるのだろうか。天皇の「お言葉」か、安倍の「憲法改正」か、米国のモンロー主義か。いずれ

にしても日本世界の未来はまだ混沌としてい
る。この混沌と混乱を「新国体の崩壊」の前
兆とみることは可能であろう。

二〇一九年五月、新天皇が即位し、平成が
終わり、令和となった。

今上天皇は、昭和天皇の遺志を良く継ぎ、
敗戦体験を最も深く体現して平成を生きてこ
られたように思える。新天皇が、どこまで父
の思いを引き継ぎ敗戦体験を風化させないよ
う行動されるか注目したいが、私の方が先に
あの世に行くだろう。

私は、今後、日米安保条約、とりわけ日米
地位協定の改定により対等な日米関係を構築
し、「ノーといえる日本」になることを望んで
いる。さらに、敗戦体験の総括を政府も国民
も徹底し、金と経済優先の社会から、「小さな
政府」を実現することにより支出を大幅に削
減し、財政赤字を解消しながら、真の民主主

義（国民の、国民による、国民のための国家）
実現に向けて、国民一人ひとりが努力し発言
行動し続けることが大事ではないかと考えて
いる。それにはまだまだ時間がかかるという
のが実感である。

三、私の戦後体験と戦後史

最期に以上の国体論を踏まえながら、私自
身の戦後体験を改めて振り返り、平凡な一市
民がどのように戦後を生きてきたかを確認し
てみたい。

第一期 「アメリカの日本」「新国体の形
成期」一九四五年～一九七五年（一九歳まで）
「アメリカに憧れ、挫折し、批判的自立精
神を養う」

私は一九四六年六月五日、福岡県北九州市
で生まれた。

父は、農家の長男であったが、農業に見切

りをつけ、機械の勉強をして麻生炭鉱につとめていた。転勤が多く、小学校は四回転校した。敗戦も米国占領も知らず、戦後の貧しさは質素な食事であったが、食べるものがないということはなかった。小学三年の時、長崎県北松浦郡の海辺の小学校に転校したとき、クラスの半分の子供たちは弁当もなく裸足で通学していた。給食がはじまるのは福岡県粕屋郡の小学五年になってからである。

5年6年生は、ある程度自己が確立し始める時期で、生涯を左右する時期のように思える。ラジオで米軍板付基地の放送をよく聞いた。米軍の基地がなぜあるかもわからず、なめらかな英語とアメリカ音楽に憧れた。プレスリーやポールアンカ、ニールセダカが好きだった。日本が戦争に負けて米国に占領されていたことなど全く知らなかった。米軍基地があることに何の疑問も持たなかった。私

は、図書館係になり、毎日図書館で本を読むのが楽しみであった。漫画を卒業し、偉人伝やシャーロックホームズの本に熱中した。

中学生になると英語クラブにはいり、英語を一生懸命勉強した。

好きで得意な科目は、英語、国語、社会で、これは高校大学と生涯続いている。美智子妃の盛大な結婚式も何も考えずにテレビで見ていた。

高校でも英語クラブに入り、2年3年の文化祭で英語劇をやった。シエークスピアの「ベニスの商人」と「ハムレット」である。また、米軍基地の家庭を訪問し、アメリカの豊かさに驚き憧れた。これらは高校最大の充実した思い出である。

当時まだ米国留学は極めて少数であったが、AFS という高校生の留学制度があり、クラブの先輩が二人も留学していた。

私も留学したいと思い、親に相談すると猛反対された。それから私の遅すぎる反抗期が始まった。それまで私は親の言うことを素直に聞くいわゆる「いい子」だったが、すべてに反抗するようになった。同時に英語や、米国への憧れが衰退していった。

大学は親の進める地元の大学を嫌い、熊本大学に進学した。家族から離れ、一人暮らしがしたかったからである。自立の始まりであった。

大学二年のとき、吉本隆明の「擬制の終焉」に出会い、近現代史や戦争の歴史に関心を持ち勉強し始めた。初めて政治や社会、天皇制について考え始めた。

セツルメントクラブに入り、水俣の開拓部落の地域奉仕活動に熱中した。また学生自治会に入り、学生会館自治活動や大学改革運動に参加した。初めての「政治の季節」であっ

た。しかし、何となく大学や学生生活、社会への漠然とした不満があっただけである。

一九六九年大学四年のとき、全国で大学紛争が吹き荒れた。バリケード封鎖で授業がなかったので、私は休学して憧れの東京に行った。私はすでに学生運動のセクト争いや抽象的議論等に嫌気がさしていた。東京で日雇労働や塾のバイトをしながら演劇の勉強をした。高校の時の演劇体験が忘れられなかったからである。翌年、復学すると嘘のように学内は静かであった。同級生たちはみんな卒業していた。授業も単位もないのに、政府は特例で全員卒業させたのである。支配者の本質を垣間見た経験である。七十年安保にも、天皇にもあまり関心がなかった。関心は、今後どんな仕事をしながら生きていくかであった。

一九七一年、東工大教授であった川喜田二郎が退職して、大学改革運動である「移動大

学運動」を開始した。私は、それに深く魅かれ、復帰前の沖縄で開催された二週間の移動大学に参加し、川喜田先生とKJ法に出会った。この出会いはその後の私の人生に大きな影響を与えた。有名な文化人類学者であった先生は、古武士のような風格をもち、アメリカに批判的で、日本人の創造性開発に強い関心を有しておられた。

卒業後、私は書くことが好きなので福岡の新聞社に就職していたが、広島で移動大学を開催するのでプロジェクトリーダーをやってほしいという依頼があった。私は一週間悩んだ末、退職して広島に行った。大学改革運動とKJ法、川喜田先生に魅せられたからである。広島で「KJ法研究会」を組織し、宮島で無事に移動大学を成功させた。この時、全面的に物心両面で協力支援してくれたのが、広島YMCA総主事の相原和光氏であった。

相原さんは、京都大学出身で官僚をめざし、満州で働き、敗戦を迎えロシアに抑留された経験を持っておられた。抑留体験で、軍の指導者たちが容易に転向していく姿を見て官僚の道を捨て、帰国後日本YMCA同盟に就職され、広島に来られた方である。平和運動に信念を持った方で、私はこの二人の方に大きな影響を受けた。出会いが人生を変える。私はYMCAに就職し、定年まで働くことになった。

一九七二年、廃校となった小学校を、青少年や社会人の研修センターとして蘇らせるために、経営と企業内教育に尽力し、発展させた。KJ法がブームとなり、大いに役立った。時代は高度成長経済で、企業は社員教育、人材育成に尽力した時代である。アメリカからも多くの経営、教育手法が日本に紹介された。私も多くの手法を学んだが、共感したのは

ボブ・コンクリンの「A I A」(心の冒険)という生涯教育プログラムだけであった。

一九七三年、オイルショックを経験し、トイレットペーパーを買いあさった。

この時期は、子供から青年にかけて、アメリカに憧れ、挫折し、様々な出会いから、歴史や社会について考え、批判的精神や自立精神を養うことができ、将来の方向が決まった時代であった。

第二期「アメリカなき日本」「新国体の相対的安定期」一九七六年～一九九三年(三〇歳～四七歳)

「アメリカに学び、世界と交流し、平和と民主主義を考え、仕事に熱中する」

一九七六年、ロッキード事件が起こり、翌年には「ジャパンアズナンバーワン」が話題を呼び、中国の改革開放が進み、米国資産の

買収が始まる中で、私は時代の大きな変化を感じ取っていた。

一九八二年、私は時代の変化を先取りするため相原総主事とともに、初めてアメリカを訪問し、パソコン事情を視察した。アメリカの大きさ、先進的科挙に驚いた。私は、「YMC A総合開発研究所」の開設を相原総主事に提案し、承認された。高度情報社会の到来を予測し、パソコンや、NTTのデータベース端末を導入し、「情報喫茶アスキス」を立ち上げた。ネットカフェの先駆けで、NHKの取材を受けた。IN通信社から出版の依頼が来て「情報喫茶アスキスからの発想―高度情報社会を生き抜く法」を初めて出版した。また「WAVE」という未来を読み解く情報誌を年六回十五年間、発行し続けた。IICという異業種交流会も立ち上げた。

一九八六年からは「国際ビジネス専門学

校」の担当になり、私は英国と中国に姉妹校縁組をして交流を深めた。私は、専修学校法を研究し、新しい時代を切り開く実践的職業教育のあるべき姿を「専門学校教育論―その理論と方法」にまとめ出版した。(学文社 一九九三)

この経験が、「キャリア(職業)教育」への関心を深め、先進的なアメリカのキャリア教育を学び、退職後、大学院で学び、キャリアアコンサルタントとして活動することにつながった。

一九八九年、昭和天皇の崩御により時代は平成へと変わり、世の中はバブル景気に沸いていた。

一九九一年には冷戦が終結し、一九九二年にはバブルが崩壊し一九九三年には、三島由紀夫が自衛隊に殴り込み自刃した。

私は三島にあまり関心がなかったが、その

壮絶な日本の危機感には衝撃を受けた。

この時期を、白井は「アメリカなき日本」と呼んだが、私個人にとっては、アメリカの偉大さを体感しアメリカに学び、世界を知り、仕事に熱中した最盛期であった。アメリカなき日本というよりは、私にとっては「アメリカの内在本化、潜在化」の時期であったと思われる。

第三期「日本のアメリカ」「新国体の崩壊期」一九九四年～二〇一八年現在(四八歳～七二歳)

(アメリカを相対化し、日本の伝統文化に目覚め、地域活動や歴史、キャリア教育に熱中する)

一九九四年、私は日本語学校を兼務するようになり、留学生教育に力を入れるようになる。中国に学生募集のため何度も訪問し、交

流が深まり、中国の歴史と偉大さに感銘を受けた。私は「日本事情」の授業を担当し、日本の歴史文化風習を教えた。

一九九五年、阪神淡路大震災が起こり、私はたまたま大阪出張中で激しい揺れを経験した。オウム真理教事件が起こり衝撃を受けた。一九九八年、福山YMCAに転勤を命じられた。

この六年間は、私が日本人としての自覚を深め、その歴史、伝統文化芸能に強い関心を持った時期である。

まず、福山在住の喜多流能楽師大島政允に出会い、謡曲を習い始めた。

それを契機に、人形浄瑠璃、新内節、長唄、小唄、端唄、浪曲等の魅力にひかれ、CDを買ってきて独学を始めた。着物の良さに目覚め、「着物で日本文化を語る会」を始めた。これが、後年出水での「着物で出水武家屋敷を

歩こう会」につながっていった。

仕事は、館長だったので体育、専門学校、日本語学校、予備校、国際交流等幅広い業務であった。予備校が衰退し、将来を見据えて廃校にして代わりに「デイサービスセンター」をオープンさせた。

福山での六年間は、日本人の自覚を深め、伝統芸能文化に心酔した時期であった。

二〇〇一年米国同時多発テロをテレビで見ながら衝撃を受けた。

二〇〇三年、福岡YMCAの理事長が来られ、総主事として来てほしいと頼まれ、私は広島を退職し福岡へと向かった。

福岡YMCAは歴史も古く、大都市にもかかわらず、小規模なYMCAであった。理由は、トップリーダーシップと内部体制の確立が不十分であるに気づき、私は大胆な改革に着手した。しかし、改革を阻む勢力が強力で

私は一年間で退職せざるを得なかった。

予測もしない突然の退職で、私はかねてからの計画であったキャリアコンサルタントの資格を取得し、福岡のハローワークで一年働いた。

二〇〇六年、妻の故郷である出水に定住することを決断して住み着いた。二〇〇七年、南日本新聞で鹿児島大学法文学部が文科省の現代GPでキャリア教育の講師を探していることを知り、手紙と履歴書を送った。

その後、面接があり採用され、十年間、鹿児島大学非常勤講師を務めることができた。

二〇〇八年、大学教授として働いていた高校時代の親友から声がかかり、東京の日本教育大学院大学の事務局長を経験した。(株)栄光が経済特区を利用して、日本の教育を変えるために、社会人経験のある教員養成大学院を開設したものである。私は共感と使命感を

抱き仕事に熱中した。同時に、伝統文化芸能の宝庫である江戸東京を満喫した。日曜日には、浅草に出かけ、浪曲、新内節文楽等を学び充実した三年間であった。また、法政大学の夜間社会人大学院のキャリアデザイン学部に入學し、修士を修得した。

さらに、広島時代、「広島KJ法研究会」の総合文化情報誌「地平線」(一九九四〜二〇〇八年)に連載してきた「戦争と平和論」を『団塊世代の戦争論』として自費出版した。究極の加害・被害体験国ニッポンとして、日本の戦争の特異性を分析し、戦争体験の思想化の大切さを訴えた。

二〇〇九年、民主党政権が誕生し、私は大きな期待を寄せたが、すぐに崩壊し、ショックを受けた。日本に健全な野党が成立し二大政党の時代が来るのはいつのことだろうか。

二〇一一年、東日本大震災が起こり、私は

東京で激しい揺れを経験した。

二〇一二年、私は出水に帰り、キャリア教育と地域活動に熱中した。

第二次安倍政権が成立していた。厚労省委託の「高校生の就職ガイダンス」登録講師として、九州、四国の高校を回った。

また、鹿児島県のハローワークの「就職支援セミナー」の講師として現在まで活動を続けている。

地域活動としては「鹿児島まちの駅」や出水市平和ガイド、戦争遺跡の会、いずみ郷土研究会等の会員として活動してきた。また、「着物で出水武家屋敷を歩こう会」を六年前から実施し、観光客の増加に貢献してきた。そして二〇一六年、共同通信社主催の第七回「地域再生大賞優秀賞」を受賞した。

この時期は、人生の終盤戦であり、アメリカを相対化し、日本の伝統文化に目覚め、退

職後様々の仕事を体験しながら、地域活動や歴史、教育に熱中した時期である。政治や天皇に強い関心を持ち始めたのも、この時期からである。

二〇一四年、集団的自衛権行使が容認され、二〇一七年アメリカにトランプ政権が誕生し、二〇一八年、米朝会談が開催され、世界は大きな変動期を迎えている。白井が「日本のアメリカ」「新国体の崩壊期」と呼んだ「失われた二〇年」後の現在は、日本人がほぼ完全にアメリカを内在化させた時期である。私の戦後史もまた、アメリカに憧れ、学び、批判し、内在化しながら、日本人として生まれた幸せを感じつつ、今日にいたっている。

四、おわりに

日本の近現代史は、まだまだ学ぶべきことがたくさんありそうだ。

私は前回、「明治六年の政変と西南戦争」

で近代日本の分岐点について触れた。明治新政府は、西郷隆盛らを弾圧することにより、フランス型の民主主義国家よりもドイツ型の中央集権国家を選択した。その結末が敗戦であり、戦後は、「自由と平和と民主主義」を理念とする「日本国憲法」に基づき、象徴天皇制を温存したアメリカ支配、従属の無意識化の過程であった。私自身の戦後史も同様な過程を経てきたことを確認してきた。

日本国憲法は、近現代の戦争と多くの犠牲者を出した結果、アメリカが自国ではとても実現できない理想を盛り込んだものである。憲法論議が盛んであるが、九条問題だけでなく、国民の権利及び義務も含め、もっと国民的レベルで議論し、憲法を血肉化するべきではなからうか。

人生一〇〇年時代を迎え、私も現在、生涯現役として、キャリア教育や地域活動に努力

している。そして、近現代史を学びなおし、七二年の人生を振り返ってきた。ごく平凡な一国民、一市民が時代の変化、大きな潮流に流されながら、全力で生きてきた事例のひとつである。

私たちが歴史を学ぶ意味は、私たちが生きている「現在」の中に「過去」と「未来」が共存しているからである。

現在をより深く理解認識するためには、どうしても過去の歴史を理解認識することが求められる。さらに未来がどうなっていくかを予測するためにも、過去現在をより深く理解しなければならぬ。

いま近現代史を学ぶ意味は、激変する世界の日本の過去、現状をより深く理解し、未来を構想するために必要不可欠な作業である。さらに、自分自身の過去・現在を理解することが、これからの人生を考えるためにも必要不

可欠な作業であると思われる。残された時間を精一杯生きていきたい。

（癒しと学びと語らいの里・ハーブガーデン花びあ（民宿・カフェ）代表、個人と地域のキャリア開発を支援する国際キャリア研究所所長）

【参考文献】

- ・「国体論 菊と星条旗」白井聡（二〇一八 集英社）

- ・「永続敗戦論―戦後日本の核心」白井聡（二〇一七 太田出版）

- ・「団塊世代の戦争論」梶原宣俊（二〇〇八 叢書見る）

- ・「吉本隆明論―戦争体験の思想」梶原宣俊（二〇〇四 新風舎）

- ・「第二の敗戦期」吉本隆明（二〇一二春秋社）

・「敗北を抱きしめて」上・下 ジョン・ダワー（岩波書店二〇〇二）

・「敗戦後論」加藤典洋（講談社 一九九六）

・「国破れてマッカーサー」西鋭夫（中公文庫 二〇〇五）



二人の永山

― 歴史を訪ねる旅 (13) ―



下土橋 渡

プロローグ ～ 西郷隆盛と屯田兵構想

1871年（明治4年）秋、西郷隆盛は腹心の陸軍少将桐野利秋に北海道を視察させ、北辺の防御について調べさせます。桐野は1869年（明治2年）に開拓史が置かれた札幌周辺を視察し、ロシア南下の実情を知り、北海道防御が急務であると西郷に報告します。西郷は桐野の報告を基に翌年に、北海道に屯田兵を配備して対露防御と北海道の開拓に当たらせる構想を主唱しました。

西郷は計画の実現をみることなく下野しましたが、西郷の構想は黒田清隆に引き継が

れ、1873年（明治6年）11月、当時北海道開拓次官だった黒田の下で屯田兵創設についての建白書が提出されます。

一、二人の永山

その建白書に二人の永山が連名しています。ともに鹿児島出身の永山武四郎（1837～1904）と永山盛弘（1838～1877年、通称を弥一郎）です。

永山武四郎は、屯田兵制度の育ての親として知られ、鹿児島に帰ることなく北海道に身を埋めた人で、第2代北海道庁長官、屯田兵司令官、第7師団長などを歴任。鹿児島よりむしろ北海道でその名が知られています。

一方、永山盛弘もまた身を以て北方経営に当たらんと志願して開拓使出仕に応じ、将来を嘱望されましたが、西南の役の出兵に異を唱えながらも、参戦し壮絶な戦死を遂げていった人でした。若林滋・編著『北の礎―屯田

兵開拓の真相―』(中西出版、2005年5月発行)から文章を引用させて頂きます。

『明治2年(1869年)創設の開拓使には薩摩出身者が多く、西郷の腹心が幹部を占めていた。明治8年で見ると、長官黒田清隆、中判官堀基、幹事調所広丈、安田定則、永山盛弘など七等出仕以上の幹部26名中薩摩出身が11名を数え、開拓使は薩摩閥といわれた。(中略)

(西南の役屯田兵遠征軍の)大隊長は本来なら永山(武四郎)准陸軍少佐ではなく、同姓の永山盛弘(弥一郎)准陸軍中佐が任命されるべきだった。が、盛弘は前年、父親の病気を理由に薩摩に帰り、西郷軍の指揮官として反乱に加わっていた。盛弘は初めは立起に慎重だったが、桐野利秋の強い懇請でやむなく立ち上がったとされる。武四郎は盛弘が屯田兵創設で苦勞を共にした、同郷の自分に相

談もなく帰国したことが悔しくて官舎の床柱を軍刀で滅多切りにしたと「琴似屯田兵百年史」にある。』

二、永山武四郎

永山武四郎は、鹿児島郡西田村(現在の鹿児島市西田町)に薩摩藩士の第四子として生まれます。1868年(明治元年)、戊辰戦争に参加。会津若松戦で勇名をあげるなどして1871年(明治3年)に陸軍大尉となります。当時の新政府では、近代的国家にふさわしい軍備を整えるべく、各藩でバラバラだった兵制を統一することになりました。薩摩藩では以前からイギリス式で訓練を行っており、武四郎もイギリス式を主張。しかし、フランス式に統一されました。

主張にやぶれた武四郎は、そのまま職に留まるのを潔しとせず、北海道の防衛と開拓が自分の新しい使命であると考え、1872年



当時の琴似屯田兵村の様子（琴似屯田兵村兵屋跡で説明板を撮影）

（明治5年）、開拓使八等出仕として北海道・札幌に在勤します。それからの武四郎は、北海道の屯田兵の育成に終始することになります。着任の翌年の1873年（明治6年）

11月に、永山盛弘らと連名で屯田兵制度設立の建白書を提案。翌年10月に屯田兵条例が制定されると、開拓使に新設された『屯田事務局』に配属となり、本格的に屯田兵の仕事に着手します。宮城、青森、山形など戊辰戦争で官軍と戦った土族158戸が第一陣として札幌の琴似兵村に入植します。その後、山鼻、発寒、新琴似、篠路、近郊の江別、野幌などで入植が進み、着実に開墾が行われていきました。

1877年（明治10年）2月15日に西南の役が勃発すると、武四郎は六百数十名の屯田兵からなる第一大隊を編成し参戦します。対戦相手は最も敬愛する郷里の先輩であり、

屯田兵構想生みの親である西郷。筆舌に尽くし難い苦悩だったに違いありませんが、武四郎は私情に流されることなく大隊長として熊本に上陸し果敢に戦いました。

西南の役から帰還した後は屯田事務局長へ累進。その後、1年間の欧米出張をへて1888年(明治21年)第2代北海道庁長官。1889年(明治22年)屯田兵司令官。1896年(明治29年)第7師団長に就任。同年、陸軍中將に進級。

軍を退役した後、貴族院議員に選ばれ、1903年(明治36年)12月議会に出席するため上京しますが、長女の嫁ぎ先の家で病に倒れます。死を悟った武四郎は親しい者たちに『我が軀は北海道に埋めよ。必ずやかの地をロシアから守らん』と述べたといわれます。翌1904年(明治37年)5月67歳で死去。遺体は遺言通り、ひつぎのまま上

野から札幌に汽車で運ばれ、札幌市豊平墓地に葬られました。葬儀の日、永山邸から豊平橋の沿道に別れを惜しむ長い人垣が続いたといわれます。現役時代は屯田兵を掌握し軍部内では一大勢力でしたが、本人に政治的野心はなく、中央の政治抗争のためにその力を使することはなかったといわれます。終生北海道を案じ、その身を捧げた武人でした。歴代の北海道庁長官で、札幌に自邸と墓があるのは武四郎ただ一人です。

第2代北海道庁長官となった武四郎は北海道でも特に内陸部の開発に着目し、当時の北海道上川郡旭川村(現旭川市)へ屯田兵村を誘致します。この村は1890年(明治23年)に武四郎に由来して永山村と改名されました。1891年(明治24年)にこの永山村に入植した岡山県出身の屯田兵が出身地の御分霊(天照大神、大国主神)を頂き、祠を



旧永山武四郎邸。木造の邸宅部分（写真上）、洋館の木造クラブ部分（写真下）



いずれも札幌市中央区北2条東6丁目の永山記念公園内

建てて祀りました。これを起源とする永山神社は1912年（明治45年）に現在地へ移され、1921年（大正9年）に永山武四郎が合祀されました。

また武四郎は、本州からの移住を促進するため上川の地に東京・京都に並ぶ『北京』をつくる構想を初代北海道長官岩村通俊から受け継ぎ政府に働き掛けますが、実現には至りませんでした。川上神社敷地内に『上川離宮予定地』の標識がたてられています。

札幌市内の北海道庁旧本庁舎へつながらる北3条通りに面した一帯は、かつて開拓使の事業所群が建設されていたところで、開拓使麦酒醸成所（その後サツポロビール）のあった跡地は、現在サツポロファクトリーになっています。その東に隣接して永山記念公園があります。園内には永山武四郎の私邸が保存されているとともに、子供たちのための遊具

設備などのほか、遊水路や広場が整備され、市民の憩いの場になっています。永山武四郎邸は1881年（明治14年）頃に建てられたといわれます。当時開拓使の官邸は十分に整備され、不自由はなかったはずなのに自ら札幌に家を建てたのです。北海道に骨を埋める覚悟であったことがうかがえます。

三、永山盛弘（弥一郎）

永山盛弘は、永山休悦の第1子として鹿児島郡荒田村（現在の鹿児島市上荒田町）に生まれました。名は盛弘、通称を弥一郎。勤王の志を抱き、これに奔走。1863年（文久2年）、有馬新七らに従って京都に上り、挙兵に荷担して失敗しましたが（寺田屋騒動）、年少であるという理由で処罰を免れました。

1867年（慶応3年）、京都詰となり、陸軍で教練に励む一方で、中村半次郎（のちの桐野利秋）らと市中見回りをしました。この年、

黒田了介と共に坂本龍馬の元を訪れています。

戊辰戦争では、小隊の監軍として鳥羽・伏見の戦いに参戦。白河攻防戦、会津若松城への進撃で勇戦しました。1869年（明治2年）に鹿児島常備隊がつくられると、大隊の教導となり、明治4年に藩が御親兵を派遣した際には、西郷隆盛に従って上京し、陸軍少佐に任じられました。しかし、ロシアの東方進出を憂えた弥一郎は、身を以て北方経営に当たらんと考え、志願して開拓使3等出仕に応じ、北海道に赴きました。

1873年（明治6年）、いわゆる征韓論が破裂して西郷隆盛が下野し、近衛の将校が大挙して退職しますが、永山は彼らと行動をともにせず、同年11月に黒田清隆北海道開拓次官の下で、永山武四郎、時任為基、安田定則と連名で右大臣岩倉具視に屯田兵創設についての建白書を提出し、ロシアの南下に備

えんと尽力しました。

しかし、政府が千島樺太交換条約を締結したことに憤激して、職を辞して鹿児島へ帰郷。永山の考え方は必ずしも私学校党と同じではなく、政府在官者を無能とはせず、大久保利通や川路利良らに対し一定の評価をし、在官者は日々進歩していると説き、私学校党に与りませんでした。この当時私学校派が幅を利かせていた薩摩において新政府を擁護することとはかなりの勇気のいることでしたが、過去の抜群の軍功と勇敢さによって、批判を受けることはなかったとされます。

出兵するか否かを決した私学校本校での大評議では、大軍を率いての上京については反対の態度をとります。永山の言い分は、西郷・桐野・篠原国幹の三将が数名の供をつれて上京し政府に直に問罪すべきというようなものでした。しかし、西郷の身を案ずる意見

が強く、永山のこの言い分は退けられ、結果として西郷の率兵上京が決定されました。しかし、永山は反対の意思を崩さず、出兵に応じませんでした。これに対し最初、辺見十郎太が説得しましたが不調に終わり、仲が良かった桐野利秋の熱心な説得でようやく同意。結果、永山は三番大隊指揮長となって、10箇小隊約2000名を率いることになりました。

しかし、熊本城攻囲戦に際しては、最も遅れて到着し、割り込む隙がなかったため、永山の部隊の多くは予備隊として後詰めをしました。1877年(明治10年)2月24日、官軍の第一旅団・第二旅団が南関に着くと、池上四郎に熊本攻囲軍の指揮をまかせ、政府軍を挟撃べく、桐野が山鹿、篠原が田原、村田新八・別府晋介が木留(熊本市内)に出張本営を設け、永山は政府軍上陸に備えて海岸

線に出張本営を設けました。

官軍南下軍が2月の高瀬の戦い以来目立った成果を収めることができず、田原坂をなかなか突破できない状況打開のため、政府は新たな軍の編成に取りかかります。これが、後に衝背軍と呼ばれる熊本南部沿岸(八代市日奈久)から薩軍の背後を衝く部隊の始まりでした。かつて永山の上司だった黒田清隆中将が参軍となり、上陸衝背軍の指揮をとりました。衝背軍上陸の報を受けた薩軍は南下軍を編成し、永山が迎撃軍の司令官に志願し川尻(熊本市川尻町)から進発しました。3月26日、小川(現宇城市)で激戦が始まり、松橋(同)まで後退するも31日には松橋も陥落。4月1日には宇土の戦いにも敗北し、緑川まで後退。

永山は、砲弾の破片を浴びて足腰に重傷を負い、熊本の二本木本営に護送されますが、



官軍上陸之地（熊本県八代市日奈久）



御船の戦いまでの西南の役マップ



永山盛弘は通称を弥一郎といい、明治十年西南の役に薩軍第三隊長となり熊本城攻囲軍を指揮しました。官軍が八代に上陸、背面にせまるにおよんで、一隊をひきいてこれに奮戦しましたが、四月十二日御船の戦に敗れ、ここにあった民家を買収し、大小荷駄税所篤信（鹿児島出身・通称佐一郎）と二人火を放ち刺交えて落命しました。薩将永山盛弘戦没の地（熊本県上益城郡御船町御船 1050 御船クリニック）

翌日、苦戦を聞いて『負けたら二度と諸君らとは見えぬ』との決意を周囲に告げて、止めるのも聞かず人力車に乗って御船へと出陣、大警視川路利良少将の別働第三旅団との戦いの指揮をとりました。御船では逆さに置いた酒樽に腰掛け、長刀を振るい、兵たちに『今日こそが貴様らの死ぬ日である。退いてくだらだらと今日は負けた負けたと語り合う日ではない。矢引き刀折れるまで戦い、みな死ぬ』と叱咤激励したといわれます。

しかし、敗勢いかんともなしがたく戦線は完全に崩壊、四面皆敵という状況に陥ったので、近くの農家の老婆に数百円を渡し家を買収して、近くの農家の老婆に数百円を渡し家を買収して、自ら火を付け自刃しました。撤退を勧めに来た荷駄掛の税所左一郎に介錯を頼んだともいわれています（当時の百円というのは、立派な屋敷を一軒新築できるといふほどの大金でした）。享年40。1877年（明

治10年）4月12日のことでした。永山武四郎を大隊長とする六百数十名の屯田兵の遠征隊が4月23日、百貫石港（熊本市）に上陸しますが、このときすでに、永山盛弘はこの世にはいなかったわけです。

弥一郎（盛弘）は戦時、和服の下にチョッキとズボンを着て、戦闘が始まると和服を脱ぎ捨て、短刀を携え身軽になって戦ったことで有名でした。『西南記伝』に『弥一郎、人と為り、沈厚にして寡黙、剛直にして清廉、裁断に長ず、而も其人に接する、穏和にして義に富む、故を以て、婦人小児と雖も、皆弥一郎に親まざるは無かりしと云ふ』とあるように、もともと婦人・子供にさえ親しまれる穏和な人で、文事にも秀でていたといわれます。弥一郎が自刃して壮絶な死を遂げた御船（熊本県上益城郡御船町）は、鹿児島県の著者の自宅から高速道路を使って2時間余り。

1月下旬の休日、ほぼ一日がかりで出かけてきました。御船の市街地にはいると中心部の国道445号沿いに御船クリニツクという病院があつて、その駐車場に『薩将永山盛弘戦没の地』という木製の碑が建っていました。

御船の戦いは両軍で数百の戦死者を出し、ために緑川は血で染まったといわれます。御船クリニツクのすぐ裏手は緑川の支流・御船川の流れになっています。その寒々とした冬枯れの河川敷を歩きながら、弥一郎のことを偲んでみると、北海道札幌に訪ねた道庁赤れんが（北海道庁旧本庁舎）などの佇まいが思い出されてくるのでした。

【参考にした図書とサイト】

- (1) 若林滋・編著『北の礎―屯田兵開拓の真相―』中西出版、2005年5

月発行

(2) 永山弥一郎―ウィキペディア

(3) 西南戦争―ウィキペディア

(4) 北海道150年。もう一人の武四郎
(北海道マガジン「カイ」)

―補遺―

天台宗大雄山南泉院（鹿児島市花尾町）住職・宮下亮善和尚が事務局長を務める『西南之役恩讐を越えての会』は南洲墓地に『西南之役官軍薩軍恩讐を越えて』の供養塔を建立し、2017年（平成29年）9月23日に慰霊法楽を行いました。その懇親会が鹿児島市内のホテルで催され、地元側から八幡正則さん（JA鹿児島県中央会元総合対策部長、JA鹿児島県信連元常務理事などを歴任）が歓迎挨拶をされました。そのなかで永山武四郎にまつわる興味深いエピソードを紹介されていますので、以下に転載させて頂きました。

『恨みに報いるに恨みをもつてするなかれー、という発句経の話も出ました。この類の話が出るたびに思い出すことがあります。それは、以前、北海道旭川の永山神社を訪れたときのことです。永山神社に祀られておりますのは北海道序第二代長官永山武四郎さんです。(中略) お伺いした夜、地元の方も交えてバーベキュー・パーティをやりましたが、そのとき隣合せた初老の方のお話です。

自分は曾祖父が富山から移住して四代目です。祖先の墓参りにときどき富山に参ります。それについても、私たちの恩人の永山長官は「自分は西郷さんと闘ったのだから薩摩には帰れない。自分は北海道の人間になったのだ」と語って居られたと伝えられています。長官がどんなにか辛かっただろうかと思えますねー、としみじみ語られるのです。思わずバーベキューの箸が止まりました。

「あつ！そうか、 そうだったのかー」。

永山武四郎さんは、自分自身で薩摩人永山武四郎と決別されたのだー。そして北海道人永山武四郎に生まれ変わらせたのだー、そうだったのだなー、闘いの場は地獄、死ぬも地獄、生きるのもまた地獄だったのだなー、と思ひ、脛が潤んだことを今でもまざまざと思ひ出します。』

(元九州職業能力発大大学教授)



鹿児島島のミニブタは何処へ行く

— 中西喜彦ブタ博士の眩きから —

守田 則一



一、はじめに

先般、鹿児島で昭和37年卒鹿児島大学医学部の平成最後の集まりがあった。盤寿を過ぎた我々はこの世で何時また会えるか保障が無いので、元気なうちにと思い立ち福岡から新幹線で鹿児島におもむいた。会場で数十年振りにT君に会った。彼は、中西と下宿のルームメイトであったことを思い出し、消息を訊ねたとき中西の携帯電話の番号を教えて貰った。それが、ミニブタ博士中西との60年振りの電話再会となった。

その後、中西が所用があり来福との連絡が

あり、筆者の休診日の金曜日にクリニックでの再会となった。午後1時から午後8時過ぎまで彼がこの世に誕生せしめたミニブタの来し方を拝聴した。大変為になったが、そのみでない彼の研究の申し子のミニブタは鹿児島では時代と共に消えていくのではないかと危惧した。絶滅種にマスコミは騒ぐが、彼がこの世に誕生せしめた医学研究上貴重な新種クラウン系ミニブタの絶滅の危機には研究者のみならずマスコミも冷たい。そんなことを思ったとき、彼との7時間に及ぶミニブタ論印象記を纏めてみようと思いついた次第である。

二、ミニブタとは(188)

筆者も中西博士(以下中西、敬称略)の話をお聴き論文と写真を見るまでは、彼の手になる新種のクラウン系ミニブタ(1、3)なるものが鹿児島島の地に存在していることは全く知ら

なかった。通常のブタを用いた医学実験は古くから知られ、アメリカでは医学実験ではルーチンに使用しているが、それにもましてミニブタを用いた医学研究の有用性は時代を画するものであることを認識した。

ブタは哺乳綱鯨偶蹄目イノシシ科に分類され、イノシシを家畜化して誕生したものである。ミニブタはそのブタの仲間である(学名 *Sus scrofa domesticus*)。一般の人は、まあ小さいブタなのね、可愛い位の反応であるが、平均身長、平均体重はまさに通常のブタの3分の1〜4分の1大のミニチュアなのである。その他の学問的な情報は表1に見る如くである。

まるい鼻がピクピク動き、発声は鼻で音を出す(余談だが鳥は気管分岐部から音をだす)。くるつとまるまった尻尾を持ち、清潔好きで、その為餌場とトイレは逆方向に設置される、

病気にも罹りにくく、汗腺が体表面にないので臭くなく、人なつこい甘えん坊で、頭もよく躰の理解も早い。犬よりはお手も上手にでき、ペットしても抜群である。福岡の地域ではペットショップでは5〜10万円位で売られている。犬よりは安く手に入る。仮に中西がペットとして売りだしたならば生産地出荷価格として最低2〜3万円ぐらいではないかと勝手に考え値段設定をさせて貰ったが、ペットとしてのミニブタブームに便乗して芸能人などの間で飼われているのは数十万円もするとか、これだけでも十分な商品価値はある。

このミニブタは学問的にみて世界的価値は言うに及ばず経済的有用性も計り知れないものがあるが、学問的有用性⁽⁴⁾⁽⁵⁾は、ミニブタの生理学と人の生理学との類似性の観点から、また臓器のサイズが人のそれに類似しているなどの利点から医学研究の実験動物と

表1 クラウン系と一般ブタの体重 (kg)

品種		月齢				
		0	3	6	9	12
ランドレース	雄	1.5	39	100	155	200
	雌	1.5	37	95	145	190
中ヨークシャー	雄	1.3	29	77	125	170
	雌	1.3	26	72	120	163
一代雑種	雌	1.4	30	83	130	180
クラウン系	雄	0.6	11	21	30	37
	雌	0.5	12	24	33	40



鹿児島大学で系統造成したクラウン系ミニブタと学生たち（平成8年撮影）。前面に横向きに見える個体（9ヶ月齢、30kg）、左から黒色と白色の個体は3ヶ月齢、15kg）、白色2頭（1週齢、900g）、右端白色（6ヶ月齢、20kg）。昭和53年3月同腹の雑ミニブタ雄1頭と雌2頭を導入し、系統造成したものである。スタートが同腹のため、雌雄2種類の遺伝子型しかなく、MHC 確立クラウン系ミニブタ C1系、C2系としてNPO 法人医用ミニブタ研究所（菱刈市）で販売されている。

図1 ミニブタの写真

しての有用性は再生医療 (IPS 細胞)、移植医学、消化器病学、内視鏡学、病態生理学等々基礎・臨床医学にわたるあらゆる領域での貴重な実験動物なのである。はたまた、中西の専門とする畜産学 (小生の理解では彼の元の所属は農学部畜産学科) の研究領域に限らず、クラウン系ミニブタ (区別を要するとき以外は以下ミニブタ) の有用性は紙幅の範囲内では説明し尽くせるものではない。

中西の研究成果は医学研究に関わる者の端くれの一人としては天地がひっくり返るほどの驚きと重大な研究成果なのである。その中西のミニブタはあまり世間に知られてないというのが問題なのである。

筆者が若ければまた鹿児島島に戻って彼といろいろと共同研究をするだけでなく、良きスポンサーを見つけ出し、ミニブタそのものの有用性を世界に示して、流通機構に乗せ広

く海外に売り出し一儲けをするのにと残念な思いである。聞くところによると、そのミニブタの遺伝子解析もなされているとの事である。少ない研究費でそこまでやったか、中西に脱帽。

三、ミニブタが天職をくれた

中西教授記念退官文集 (8) を読んでいたら、彼が大学学食で昼食を摂っていたら、横の若いカップルの学生が「俺は本当は鹿児島大学に入学したくなかったのだが……」と言う話を小耳に挟んだのを呼び水に、鹿児島大学の現在・未来について中西が述べているくだりがあるが、察するにこの会話が耳に付いたのは、何もなかった昭和31年 (1956年) の鹿児島大学に入学した中西の心境にもこれに近い思いがあり、それと重なったのではないかと推察する。この悩みは地方大学の宿命である。

筆者も昭和31年に鹿児島大学医学部に入学した一人であるが、昭和31年にその前身である鹿児島県立医科大学が国立大学に移管され、総合大学として鹿児島大学医学部に編入され県立から国立に昇格したときの医学進学課程の第1回生であるので、その気持ちに分かる。鹿児島大学は当時2期校とし全国で唯一の医学部がある大学であったが（当時国立大学は今のA日程B日程とは言わず1期校2期校と言っていた）。筆者も6年間劣等感に苛まされ無茶苦茶に勉強した。狭い見の筆者には鹿児島の地は勉強以外には何もすることが無かったが、鹿児島大学教養課程は旧制第七高等学校造士館の後身で、七高の名物教授が目白押しであった、そこで己の無知を知った。中西と筆者は道は違ったが、二人が見つけたものは無知を出発点として、我が行く道、天職とはなにか、それを鹿児島の地で

見つけることが出来たのではないかと思う。

前述の二人の学生もきつと鹿児島大学の場で4年かけてそれを見つけてくれた事と思う。彼等の鹿児島大学の存在意義は「入学しなくなかった」所にある。大学が風光明媚であろうと無かるうと、己のバカを知るチャンスはある。バカを出発点として中西はミニブタをこの世に送り出した。これが彼の見つけた天職である。それには鹿児島大学という「場」が必要であったのである。

四、ミニブタ適者生存の戦略

このミニブタは医学研究への応用のみならず、経済効果も計り知れないものがあることは少し触れた。ミニブタが生存競争に勝ち、世界制覇をするためには他の研究者にも中西の研究の価値を知らしめなければならぬ。その戦略がうまくいかなかった場合何故かを検討する必要がある。それは他の研究者がそ

の価値を知らない故であると言つてしまえば簡単だが、時には相手の立場に立つて説明する必要がある。それに関する限りは今からでも遅くない。

その場合の戦略は、説明が苦心談のお粗末にならないように、その研究の真髓と意義を相手に分かせて、未来に向かつて何をしなくてはいけないか等を具体的に知らしめる事がミニブタ適者生存の条件となる。その為の説明の技術のみならず、それを説明する自身身を磨かねばならない。相手を説得すると言うことは大変難しい。坊主以上に難しい（坊主には教義がある、ミニブタ生存競争にはマヌアルはない）。

坊主が釈迦の教えを説くとき、聞く耳のないひとは如何ともし難いと思ひ諦めるのではなく、バカはバカなりに説得せねばならない。その為には親鸞のように日々自分を今以上に

磨かねばならない。

モツアルトの曲は大音楽家には文句なく理解出来るが、バカにもバカなりに理解出来ると言うのと一般である。中西も相手が理解出来ないのは相手が馬鹿であつたとしても、バカはバカなりに分かるようにすべき説得力が不足であつたことを悟り、自分の何処が足らなかつたかを分析しない限り、同じ説明を何度しても相手には永久に伝わらず、ミニブタは生存競争には勝てない。

今回7時間に渡つてミニブタの話しを彼から伺つたとき、「研究成果の素晴らしきは分かるが、君の研究成果とその話はノーベル賞を貰うまでの話した」と、「ノーベル賞後の山中伸弥と本庶祐氏の動きを真似せねばナンセンスである」と、彼には悪いと思つたが敢えてその時突つ込みを入れた。このままでは仮にミニブタは生き残れても、ミニブタを用い

た医学研究等が本家の鹿児島でどんどん進まなければ意味がない。鹿児島が世界をリードする可能性を秘めた素晴らしいミニブタという武器を持っているにもかかわらず、その武器の真価が理解されぬまま時間だけが過ぎ、中西も余命を使い果たし、クラウン系ミニブタは細々と餌を食っているだけの存在になってしまふのでないかと心配した。

筆者も己の研究を相手に分からせるのに学会で一方的に自分の研究成果を発表して、これが真理であると言ってみたとこで、その研究は世間で受け入れられるとは限らない事を痛感している。実際、筆者も癌治療研究に対して特許を二つほど獲得したものの、それだけの事である。中西もこのままではミニブタの研究の素晴らしさの割りには、他の機関から多くの研究費すら引き出すことは出来ないのみならず、ミニブタを使った医学研究

を広めることも困難であろう。NPOでの彼の働き(1)も十分な力を発揮し得ないであろう。それが出来るかどうか、過去の分析をベースに彼が如何に説明・説得の戦略を修正していくにかかっている。ミニブタが生存競争に勝って適者生存者として世界を制覇出来るか、消えていく運命にあるかは研究者中西自身の未来への戦略に委ねられていると言えよう。

五、ミニブタと学者馬鹿

中西はエライ人にミニブタの重要性を陳情?したが取り上げて貰えなかったことを嘆いていたが、その時筆者は「相手が学長であれ、お上のお偉方であれ、相手が何処までエライか、何処までバカであるかを見極めて話しをしないと中西の話は理解されず、その重要性は取り上げられることもなく、聞き置くだけに留まると言うことを承知すべきであっ

た」と、突っ込みを入れた。中西の研究の素晴らしさを仮に理解されたとしても、どうすれば中西のやりたいことを、相手が実行に移せるかを双方で議論しないと、それまでの話しになる。陳情には相手が飛びつく目玉がいる、それはミニブタ研究の医学貢献と社会貢献度が如何に大きいかも相手にわかって貰えねばならない。それだけの価値がミニブタにはあるにもかかわらず残念である。

繰り返すことになるが、中西は自分の研究とそれに対してこれまでやって来たことを時間をかけて丁寧に喋ったからこれでよし、としたのではその陳情書はシュレッダーにかけられるだけである。彼の世界的な素晴らしい研究と、彼の新種のミニブタが如何なる価値を持ち社会に貢献するものであるかを知るために、中西の書いた膨大な研究論文を読む暇は相手にはない。陳情の短時間で彼の説明が、何故

うまく理解が得られなかったか、例えされたとしても、相手を動かす事が出来なかったのは何故かを、考えなくてはいけない。中西の話は筆者を感動させて鳥肌を立たせたが、彼の素晴らしいミニブタ研究をオエラ方に対して、如何にうまく説明出来たかではなく、何がうまく説明出来ていないのかを反省しないと、おエラ方に対して同じ間違いを繰り返す事になる。その原因は学者馬鹿の自分自身にあることを気づいているに違いないが、相手がバカだと諦めたに違いない。

彼がミニブタの話しを筆者にしていると、彼は英語の論文を提示しながら、明瞭に且つ非常に丁寧に、相手の反応を見ることがなしに（相手の反応は分かっていたが彼自身が喋り足りないと思っただけだろうが）滔々と小生に喋った。小生が半畳を入れたたくてむずむずしているのに、気づく事なく（気付いて

いたが敢えて無視をして、悪く言えば自己陶醉のなかで、あたかも觀念奔逸的に喋った。

これはよくある、或る種の学者バカの「悦」の境地に近い。これでは相手を説得したことはない(失礼)。その為には第2の中西なる参謀が必要である。良き参謀が自分の脳の中に作れない場合には、彼と徹底的に議論出来る相手が必要である。自分の研究が如何に優れているのかを補足するアドバイスではなく、何が欠けているかを知らしめることを議論できる他者が必要である。また、この研究の社会貢献度も分からせてくれる別の中西も必要がある。それなくして如何によい研究でも九分九厘相手に通じず、生存競争の中で自然淘汰される恐れがある。

こんな事を言ったら中西君はなんと反論するだろうか。こんな事を書いたらこの随想は没になるだろうか、彼が没にしたのなら読

んだ結果だろうから、それで我が意は通ずる。

六、ミニブタ適者生存の実践の為には

この素晴らしいクラウン系ミニブタの研究成果とミニブタの価値とその社会貢献度を世界に広める為に中西に与えられた使命は、良き後継者を沢山育て、そのミニブタが如何にエポックメイキングなユニークな新種であるかをあらゆる機会を捉え、あらゆる角度から、あらゆる領域の人々に知らしめねばならぬ。彼の作ったミニブタは世界に類を見ないユニークな鹿児島畜産界の財産である。これを世に広めることである。それをやっているに違いないが、更に残された余命を燃やすべきである。

私も鹿大腫瘍研から福岡大学の内科助教に移籍したとき、新しい研究環境の中で腫瘍研時代に行ってきた研究の殆ど全てを失った。その後福岡大学の健康管理センター診療

所長の重責を務めたとき、新たに新地でえた

研究も大学を去るときに置き去りになった。

その点中西は幸せだ、鹿児島と言う地で終始

一貫した自分の研究を続ける環境に恵まれ、

良き弟子にも恵まれていた。筆者は今日、一

町医として診療に日々追われているときに、

ふと過去の研究を振り返ることがあるが、中

西と同じように、ノーベル賞を目的として

(?) アメリカまで行って、自分の研究を完

遂せんとしたものは、帰国してみても、一

代限りで終わっていることに気づき齒ぎしり

をした。些細な研究でも次世代に残していく

ためには、良き後継者を沢山育てなければ、

単に沢山の論文を書いただけでは駄目だと言

うことを痛感している。己の研究の良き後継

者を、幾人も幾人も育てなくてはならない、

多くの後継者を得ない限り、幾百編の論文も、
その研究も一代限りで終わる。これが研究者

の宿命である。

中西は畜産界でミニブタの適者生存を実

践しなくてはならない。ダーウインの理論は

恐らく現在にも適用出来る。ミニブタの過去

の素晴らしい物語を、未来の物語にせねばな

らない。自分の壁を打ち破り、その中に次世

代のDNAを取り入れ、新しきミニブタを作

らねばならない、過去を未来に繋ぐ使命が、

ミニブタ博士の中西には残されている。これ

ら全てがミニブタ適者生存の実践である。

己の平均寿命云々(8)を言つて惚ける暇は

ない。平均値の標準偏差の2倍を飛び出した

所の中西の才能が、ミニブタを作り出した事

を忘れていた。彼に向かつてしっかりと

言いたかったが、彼は知識が溢れ、小生が更

なる突っ込みを入れる隙を与えなかった。

七、ミニブタと研究システムの再構築

中西のクラウン系ミニブタを、仮に医学研

究領域に導入するとした場合、アメリカなどの研究組織とは異なり、本邦に於ける多くの大学医学部の講座制の組織では、研究システムの変更が必要となる。主任教授一人の決裁では実行不可能な事がある。京都大学のEDU細胞研究に見る如く独立に新たに公的研究機関を設立する必要がある、それが出来ない場合は既存の各研究機関の中に研究体制の再構築をする以外には方法はない。

それ程彼の研究成果はどえらいものである。日本とは言わぬまでも鹿児島の際には再構築が必要である。それだけの価値が中西ミニブタにはある。しかし、仮に医学部にシステム再構築が出来たとしても、全くこれまでの研究になかったミニブタを用いる医学研究の場合、医学部には蓄積されたデータはなくミニブタを零から勉強しなす必要もある。

その教育に何年を要するか、それを誰がする

か、その費用はどうするか、長い目で見れば時代を画するに違いない中西ミニブタを用いる研究であるとしても、世界を相手とする生存競争の激しい医学研究の中で、現在進行中の喫緊の研究に置き換えることが出来るか等、受け入れ側の研究体制も中西を交えて検討せねばならない。仮にミニブタを導入することが決まっても、医学部のアニマルセンターにそのスペースがあるか、その管理の専門家がいるか、アニマルセンターでの諸費用の予算があるか、等々色々な問題に直面する。これまで、マウスや犬や猿などを用いて蓄積された研究データは、どうなるか摺り合わせが必要となる。しかし、良き研究協力者と資金があればそれは出来る。

八、テイクオフエネルギー

上述の背景下に医学研究へミニブタを導入するには廃藩置県と廃刀令を実行するに相

当するテイクオフエネルギーが必要である。また、受け入れ側にも中西と同じレベルの知識と能力を持った人材が少なくとも一人は必要である。また、全体を統括出来る大久保利通と西郷隆盛の智慧と先見性と腕力を併せ持つ人材が必要であろう。これが一旦実行された場合は医学維新をもたらす事は必定。

更に、医学研究以外の領域でもミニブタを生かすためには学際的な研究システムの構築が必要である。広範囲にわたる中西の力が試される。なにはともあれ、中西ミニブタは鹿児島に潜在エネルギーがきつと成功させるだろう。維新のエネルギーの使い残りのマグマが鹿児島には温存されている。鹿児島大学に入学したくなかった若者も立て、鹿児島大学に入学したことが運命だ、この地なら秘めたる才能は發揮出来る、天職が君らを待っている。また、先輩の鹿児島に隠れ西郷と隠れ大久保

よ、切り込み隊長の桐野よ、中西ミニブタを世界のミニブタにしてみようではないか。

九、終わりに

彼とミニブタ論のあり方を議論するには、一週間あっても足りないだろう。彼のクラウン系ミニブタは社会に大きく貢献することは間違いない、それに全てをかけた彼の60年間を今回の7時間で分かせようとするのはどだい無理な話であった。遂に日が暮れて初夏の空も夜の帳は降りて、話しは結論保留のまま先送りされてしまったので、少しここに筆者の考えを補足した次第である。これは中西君を批判しているのではない。誤解のない事を願い、彼の今後の活躍に期待し、未来の道を歩くミニブタを見つめることにする。

最後に、彼の業績は枚挙に遑がないが小生の随想が尊敬する中西君のホラ話でないこととの根拠となった、文献の一部を示す。

(元鹿児島大学医学部付属腫瘍研究施設講師、元米国カリフォルニア大学 UCLA 客員教授、元福岡大学健康管理センター診療所所長、もりた胃腸科クリニック 院長、医学博士)

【参考文献】

1. クラウン系ミニブタの概要 (NPO法人医用ミニブタ研究所発行、鹿児島)
2. 中西喜彦：鹿児島大学ミニブタプロジェクト運営に関する提言 (平成20年)
3. The MINIPIG in Biomedical Research: Friederike Köhn; Clawn Miniature Swine(History and Development of Miniature, Micro, and Minipigs) 7P, CRC Press, 2013
4. 山田和彦：産学連携で実現する最先端の移植・再生医療研究(本学に誇る医
用ミニブタを活用して推進する世界的
臨床研究) KADAI JOURNAL, 14
-15, 2018
5. 辻 隆之、中西喜彦：組織、細胞供給源とミニブタの再生医療に果たす役割, BIO INDUSTRY 17(No7), 34-41, 2000
6. 中西喜彦：特集・医用動物としてのミニブタ。わが国におけるミニブタ開発の現状。アニテックス, 11(1), 3-11, 1999
7. 中西喜彦：異種間移植にかける夢、実験医学, 17, 36-41, 1999
8. 中西喜彦：馬鹿「ネコ」和尚の高上がり (中西喜彦鹿児島大学退官記念文集、平成14年)



鹿児島城趾御楼門復元と

薩摩藩の能文化

中西 喜彦



一、はじめに

鹿児島では来年三月に鹿児島城趾に御楼門が復元完成する。その内側には昔立派な建物があった。例えば御楼門に入り、左側には御馬召（厩）がある。さらに進むと能の楽屋とみられる熊の間、橋掛り、能舞台、東側と南面に庭を望んで、客間として鷺の間と麒麟の間が位置し、能舞台の正面は奥書院でそこから能を見物する仕掛けである（写真1）。

このことは一昨年暮、県立埋蔵文化財センターの発掘現場調査報告があり、発掘場所の

関係で橋掛りだけです確認されました。長さ9・5メートル、幅1・4メートルの本格的なものである。

現在の鹿児島はNHK大河ドラマでも「篤姫」や「西郷どん」で、武の国の印象が強い。しかし、城内では能が盛んに行われ、本舞台と敷舞台があった（写真1）。城下では諏訪神社（南方神社）境内の頭家能舞台（現春日町）、中西家舞台（現東千石町）、柏家舞台（現柳町）および小幡家舞台（現薬師町）が記録されている。しかしながら、御楼門復元事業と関連して能が語られることは殆どない（写真2）。

唯一、鹿児島に現存する能関連施設は県民交流センター一階の県民ホール（能舞台）である。平成15年4月に設立され、現在に至っている。多目的ホールと言う特徴はあるが、能舞台はヒノキ造りで本格的なものである。普段は奥に収納されているが観客席約670

席、車椅子の人まで収容出来るものである。

筆者は全国の能舞台を見る限りにおいて、県民交流センター能舞台の設置場所、その建造物の規模に驚くのである。色々調べてみると、その理由が理解できるようになった。薩摩藩初代藩主家久公から幕末の久光公まで能を限りなく愛好し、外交や個人の思想形成に励まれていた。その忘れ形見がこのような形で残ったのではないかと思うようになった。

この度の御楼門復元完成を迎えて、能舞台をセットにして文武両道の国鹿児島のシンボルに出来ないかと考えます。ところが関係者に能の魅力を説明しようにも「群盲象を撫でる」の伝で、今や能を観たことも聞いた事もない人にどう説明するかに窮します。

そこで、○江戸時代初期から幕末までの薩摩藩主の能への愛好振り、○平成になって入来薪能を7回も主催された本誌生みの親入来

院貞子さんの話、○第30回国民文化祭鹿児島大会「能楽の祭典」の紹介などをしてしたいと思います。

拙文をご覧頂いた諸賢に能の魅力を感じ、薩摩の能文化再考の一助になれば望外の喜びです。

二、能楽とは

能は室町時代に観阿弥・世阿弥親子によって、確立され、現代まで維持愛好されている。既に南北朝時代から將軍や武將によって能楽愛好の風が広がっていた。以来幕末まで約五百年に亘って武家文化の大きな柱の一つとして歩み続けてきた。

天野文雄によると、「武將達が能のどこに惹かれたか」というと、一つは、それが我が国の芸能史上はじめて生まれた演劇だということであろう。能は音楽（謡）と舞踊（所作）が一体となった歌舞劇で、そうした総合的な芸

能はかつてなかった。もう一つは能の詞章が武家文化の中心的位置を占めていた和歌や連歌と同質の詩的文章でつづられていることがあげられるだろう」と述べている。

秀吉の能への最大の貢献として、4座保護策がある。大名負担で観世座995石、宝生座960石、金剛座815石、金春座は豊臣家直轄であり、大夫は500石だったと言う。徳川に政権が移ってから原則的には継承されている。これにより、4座の能役者は生活が安定し芸事に専念出来るようになったという。後で喜多流が加わり5座になるが、秀吉はこれ以外にもあった座を4流派のなかに吸収合併して能楽の式楽としての地位を確立した(岩波講座、第一巻 能・狂言の歴史)。

能楽は、江戸時代初期には、豊臣秀吉や徳川家康の能楽愛好ぶりをみて、各藩主たちは、大名間の外交に果たす能の役割の大きさに気

付いた。幕府に従順さを示すために、文化に熱心な藩としても各藩主は能楽師を雇用して、祝賀行事など接待客への披露や藩士達の教養として稽古に務めた。

三、能を愛好した薩摩藩主たち

薩摩藩における江戸時代初期や最盛期、さらに幕末にかけての歴代藩主の能楽と向き合い方を紹介してみたい。歴史上の人物である薩摩藩主の能楽への向き合いを通じて、能楽の魅力再発見に繋がることを期待するものである。

○初代薩摩藩主家久公(1576~1638)

慶長5年(1600)家督を継ぐとともに、鹿児島城築城(1602)、琉球平定(1609)など薩摩藩のその後の基礎固めを行っている。丁度この頃は関ヶ原合戦後天下統一が徳川家を中心に確立出来るかどうかの緊張した時期である。能楽の導入もこれらの時代の

動きに合わせた一環と考えられる。

慶長7年（1602）秀吉公の能指南役の一人であった坊官下間少進（本願寺の家老役、素人能役者）の弟子である虎屋長門（中西長門守）を能役者として300石で召抱えている。さらに、1620年には千石に加増した。

家久の父義弘は、関ヶ原の合戦で西軍側に廻り、徳川軍の中を強行突破して薩摩まで帰国したことで有名である。その帰国に力を尽くした者への加増が50石と言われている。如何に長門が厚遇されたかを示している。当時外交の中心は皇居のある京都であり、家久は禁中で能を演じていた長門を薩摩外交官として重用するとともに、藩内では能文化の伝道者として活用している。

家久の能への傾倒の様子は色々な手紙や日記等で残っているが、自分の召し抱えた長門に宛てた手紙に、下間少進の著した能の型付

書である「童舞抄」を写して、長門に決して他に漏らさないと感謝の手紙を送っている。

下間少進から秘伝書の相伝を受けたことを意味している。また、若い頃は能「花筐」の小道具である花かごを作って周囲に見せ、軟弱であると父義弘を心配させたと伝えられる。

諏訪神社（南方神社）の大祭に合わせて頭屋能舞台で7月18日に能が奉納されるようになったのも家久の時代からと言われている。前述の行事や長門の家系も明治初期まで時代の波を受けながら継続されている（写真2）。

○8代薩摩藩主重豪公（1745～1833）

重豪公は7代藩主重年の嫡男として延享2年（1745）に生まれ、89歳の長寿を保たれた。開明派大名として周知の殿様である。

しかし、能楽との関係では鹿児島在住の人でもほとんど専門家以外は定かでない。重豪の祖父5代藩主継豊は5代將軍綱吉の養女竹姫

を嫁に迎えている。重豪の父重年が早逝したため、重豪は11歳で藩主となり、祖父継豊が後見人となった。江戸の藩邸での生活が多く、祖母竹姫が重豪の養育にあたった。また、

この竹姫の遺言で重豪の三女茂姫が將軍家斉の御台所になり幕府との縁が深くなった。

能楽の面から特記することとして、綱吉公の代になって能楽が一時期を画したことである。自分が舞うだけでなく、小姓や大名達に出演を強要するなど、秀吉以上の能気違いだったと言われている。その一面として、綱吉の宝生鬮貞に合わせて、加賀の前田家や尾張徳川家も金春流主体だった自藩の能を宝生流主体に変えたと言われている。薩摩藩も同様である。

重豪公もこのような背景の中で能楽に親しんで居る。宝暦13年(1768)19歳の時宝生九郎友精から翁舞の伝授を受けている。

また、20歳の時、薩摩の稻荷大明神で結願のため法楽能をもよおし、嵐山、田村、羽衣、安宅および弓八幡の5番を独演している。

幕府と縁を強めた重豪は壮年期には將軍岳父として江戸藩邸で演能の会を度々設けている。43歳で隠居すると公式演能記録が途絶えている。しかし、71歳の時高輪邸の祝賀会で自ら綾鼓と井筒の能を演じている。進取の気性に富んだ学問好きの藩主として多面的活動で知られが、能への取り組は、江戸藩邸を舞台に公家や大名間の外交手段として盛んだったことが伺える。

(家久公、重豪公の記録については林和利元鹿児島女子大(現志学館大学)助教授時代の得難い研究報告を参考に纏めました)。

○11代斉彬公(1809~1857)

斉彬公初入部に際して、家督内証祝として、一門四家の家族一同が城内に招かれている。

宮尾登美子氏の小説「篤姫」の描写を借りてその様子を紹介してみたい。『奥書院へ四家一同着座。その後一人ずつ奥小姓の案内で席を能舞台の隣の控えの間に移し、斉彬の個別謁見を受けた。

このあと、四つ時（10時頃）から、「翁三番叟」が始まり、一旦休んで、吸い物と盃、菓子がだされ、斉彬は御簾のうちに入つてのち一同寛いで、「高砂」「田村」「羽衣」「鞍馬天狗」を観覧。

ここで中入りとなり、四家の主のみ元の書院で二汁五菜の饗応がなされて、子供たちは唐子之間で二汁三菜お菓子付の献立であった。その後は再び狂言の「末広がり」「素袍落」を見物、最後にはまたお菓子お茶を頂いて、夕闇の迫る頃、分家一同下城した』とあります。

（宮尾登美子 篤姫より）

○国父久光公（1817～1887）

久光公は斉彬公没後、薩摩藩をまとめて明治維新を成功させた立役者である。実子12代忠義を後見する形で藩政を主導したため国父と呼ばれている。明治10年の西南の役で、鹿児島（鶴丸）城が焼失し、明治12年に斉興の時建てられた玉里邸を改修して入居され、晩年をここで過ごされています。

今回は「島津家黎明館預託文書」の中にある能組と鹿児島大学図書館玉里文庫中の久光公愛用の宝生流謡曲集で曲目ごとに稽古回数が見られているものを資料として調べてみました。

明治17年11月からほぼ一ヶ月間隔で、71歳でお亡くなりになった明治20年12月の四ヶ月前まで、1日で能5番、狂言5番が演じられていました。2年10ヶ月の間に宝生流名寄せの180曲中109曲が演じら

れており、演目では高砂、老松、鉢木、船弁慶、融、阿漕、殺生石など現在でも人気曲が2回上演されていた。

一方、謡曲稽古回数を現在の名寄180曲で見ると、165曲(92%)に印がつけてあった。曲目別稽古回数は1回(40%)2回(36%)、3回(11%)、4回(4・4%)および5回(0・6%)となっており、大変熱心に稽古をされた様子が窺えた。5回のもは鉢木、3〜4回目のもは三番目の鬚物能より、二番目の修羅能や五番目の尾能が多く、未稽古のものに三番目ものの小町ものがあつた。

以上約300年に亘る薩摩の殿様の能への関わりを拾い上げてみた。一番感じることとは愛好された曲目(演じられた)を知るとお人柄に触れたようで、今までと違った親近感を感じることである。

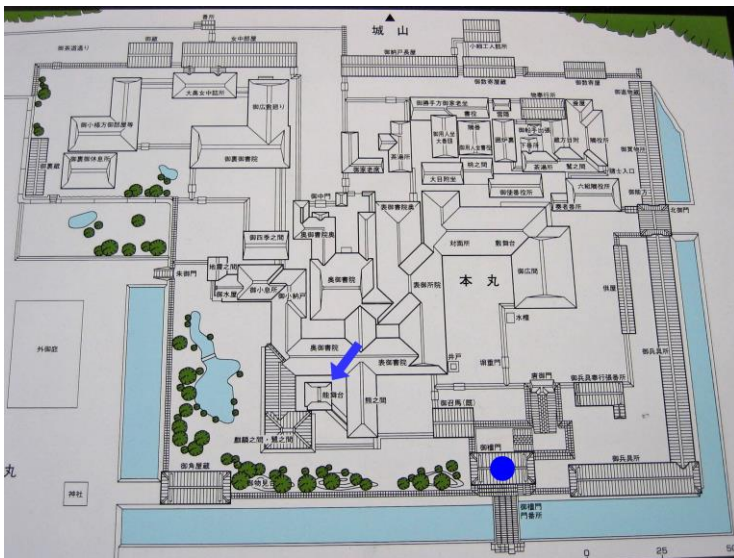


写真1 鹿兒島城再現模型～江戸時代後期(黎明館)

● 印が御楼門、矢(↓) 印が能舞台

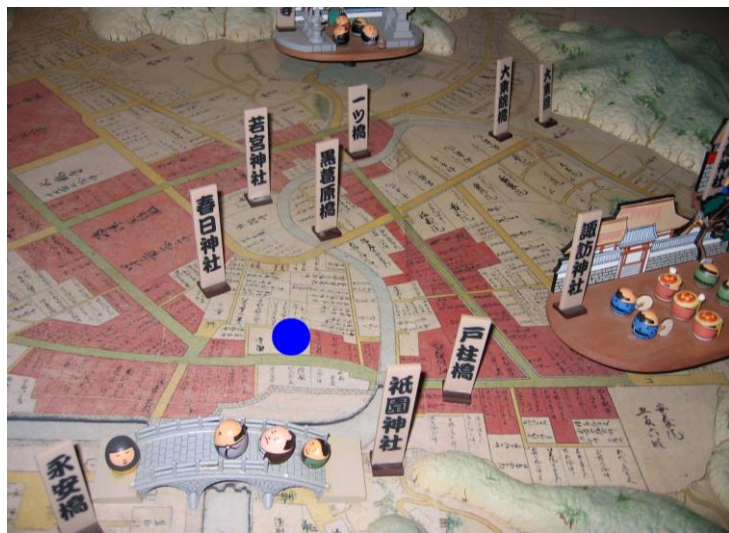


写真2 頭屋能舞台と周辺神社のパノラマ写真」(石橋記念公園)

● 印が頭家能舞台



写真3 家久公が愛した能「花籠 (はながたみ)」
(皇子と照る日の前) の若き日の恋物語

四、入来薪能（清色城趾）のこと

薪能を主催され故入来院貞子さんに原稿を頂いた鹿児島謡曲連合会会報「風姿」5号の第7回入来薪能紹介文から要点を拾って掲示します。

平成10年の渋谷氏下向750年記念イベントの成功に続く町興しを模索したこと。在京中夫婦で習われていた観世流鍔仙会の若松健史先生が長崎の諏訪神社で諏訪を舞われることを聞きこれだと思われたこと。機会を作って先生に清色城趾をお見せし、最高の舞台になると折り紙をつけられたこと。

これからが貞子さんの真骨頂です。そのまま会報の文を再度掲載します。

『実際の作業に当たると土地の者は誰一人能を観たこともない。百聞は一見にしかずと、岡山の上稲荷で薪能をなさる先生の舞台を観ることにした。』

ワゴン車に町の企画課長と職員、大工さん、照明音響担当者と私と花木会会計の6人で早朝出発。一泊の見学を強行した。そして、舞台や照明に必要な知識を得て第一歩を踏み出せたのだった。

第一回は「天鼓」、二回目に「巴」を用意して雨のため中止。それから「清経」「鳥追」「屋島」「忠度」と基本的には毎年続けて来た。しかし、赤字を個人的に補うことに限界が来ていたことと、私が発がんしたため5年間の空白になってしまった。今回再開出来たことは本当に幸せなことだと思う。

ご来場の方々は異口同音に「素晴らしい」「感激した」と言われる。実際、ご覧になれば、日本の伝統芸能の持つ芸術性に打たれるのだ。そして私はその意義を噛みしめる。ただ赤字は入場者数に反比例するので、今年も結構な額を背負う羽目になってしまった。



写真4 清色城址仮設能舞台の前で開会挨拶をされる故入院貞子さん
(平成21年8月28日)

この入来薪能が赤字に悩まされることなく大らかに企画出来るような仕組みが出来ないものだろうか。この地の行事として、より多くの方々になることを切望している(風姿5号より抜粋)。

演目は殆ど修羅物で中世の武士の世界を紹介されたかったのではないかと思います。さらに、貞子さんの発想の豊かさは「鳥追舟」はJR川内駅近くの鳥追の森付近を物語の舞台とされていることから駅前広場に鳥追舟の親子像を設置されたことである。

五、第30回国民文化祭鹿児島大会

「能楽の祭典」について

平成27年11月4日(水)、5日(木)にわたってかごしま県民交流センター県民ホール(能舞台)で開催されました。

初日は模範演技として、宝生、金春両宗家の演能、観世の仕舞、茂山家の狂言が演じら

れました。

森博幸市長の挨拶後、金春流素謡「翁」、金春流能「枕慈童」、宝生流能「舟弁慶」、観世流仕舞「忠度」、大藏流狂言「太刀奪」が演じられました。

二日目の能愛好者交流会では5流派に所属する方が、北海道、仙台、東京、大阪、九州一円から25団体ご参加頂き、午前9時30分から午後6時30分まで熱演されました。

両日とも晴天に恵まれ、会場は両日とも満員の盛況でした。

会場内のロビーでは「鹿児島能楽の歴史散歩」能楽を愛好した藩主たち」のパネル展示、能楽5流派の舞扇展示および各種の能面展示や面打実演などが披露されました。

調査統計では出演者数441人、来場者1426人でした。

筆者は「能楽の祭典」企画委員長として参



写真5 第30回国民文化祭鹿児島大会「能楽の祭典」
素謡「鶴亀」 宝生流教授囑託会参加者全員

加しましたが県、市など行政の絶大なるご配慮は勿論ですが、鹿児島謡曲連合会会員の皆さんの温かい協力をえました。また、流友の方では宝生流教授嘱託会九州支部長の肝いりで素謡「鶴亀」を無本で謡うことになりました。写真で見られるように約50人が舞台の上に出ています。シテ役が本部の理事長、ワキ役が地元の小生、残り地謡という設定でした。楽屋で人の居ない合間をみてシテと二人で間違えないよう申合せで謡ったのを思い出します。

六、「二所懸命」から生まれた能の世界

一般に能の魅力として、行かずして名所旧跡を知る。知らずして高貴と交わるなど色々魅力が挙げられている。しかし、能が武家文化の代表と言われる所以はもう少し深いところにあるように思われる。司馬遼太郎氏は「この国のかたち」の中で我が国は律令制か

ら封建社会、すなわち武家の社会になって、鎌倉時代は武士とよばれる開拓農民が父親の開拓した田地を一所として懸命に確保した。それが室町時代に続き、土地生産力の向上と貨幣経済の発達により能・狂言・茶道・華道、数寄屋造りなどが発達し日本文化の基礎になったと述べている。

和文の発達につれ、万葉集、古今和歌集、源氏物語、伊勢物語、太平記などが作られ、それを元に色々な物語が脚本された。当初は観るだけだったのが、武士も謡い舞うようになった。秀吉などは自分の忠孝、武勇、幽玄、奇瑞などを新作能として作らせ、自分で演じたという。

哲学者梅原猛氏は東北大震災を人災と断じ、「天台本覚思想」である「草木国土悉皆成仏」を「人類哲学へ」と提案しておられる。そしてその思想は能の中に最も多く含まれている

という。「我」の世界、自然を奴隷のごとくに扱う現代世界に疑問をのべている。

○演能曲目を通じて見えてくるもの

前述の故入来院貞子さんは町興しの一事業として、鎌倉時代から幕末まで殆ど現地に居住した入来院家の領地だった入来院で、武家社会の一面を能で表現しようとされたのでしよう。川内が舞台の鳥追舟は土地訴訟問題、勝戦、敗戦、夫婦での戦、武人の嗜み、戦で自殺した夫への妻の恨みなど。殆ど武家社会の話です。

一方、薩摩の殿様の演能状態はどうでしょうか。家久公は朝鮮の役での勇猛な戦い振り、伊集院忠棟惨殺事件など近寄り難い殿様との感じを持ちます。それが若いころ写真のような継体天皇と女御の若き日の恋物語を演じるのですから観る人の印象は普段と違ったでしょう。家康にも可愛がられたとの記録がある

ようです(写真3)。

時代が綱吉公、吉宗公の時代になり、薩摩では継豊公、重年公、重豪公と続きます。重豪公はご母堂早逝のため、実際は綱吉公の養女で祖母にあたる竹姫に江戸屋敷で育てられます。父親の重年公も早逝され、重豪公は1歳で祖父継豊の後見のもと藩主となります。竹姫は公家の出で、叔母が綱吉公の側室であったため大奥勤めでしたが、会津藩主松平正容の嫡子正邦と婚約します。しかし、その直後相手は病死します。その後綱吉公も没し、幾つかの縁談後、今度は吉宗公の養女として、継豊公への縁談になります。婚礼には芝薩摩藩邸横に7千坪の敷地を無償で与えられたとあります(松尾千歳氏論文より)。

前述のように綱吉公は秀吉公以来の能気遣いと言われ、現在のように能を素謡、仕舞、舞囃子のように演技法を工夫し、なるべく多

くの人が楽しめるようにしました。重豪はいわば竹姫の縁で徳川一家みたいなもので、前述の若い時代の能への傾倒ぶりが理解出来ません。

晩年71歳時、高輪藩邸で演能の綾鼓は、庭番の老人の女御に対する恋物語。井筒は昔一緒に暮らした女が業平の衣装をつけ井筒（井戸）の水鏡に映る姿に見込む姿に。招待客は大変感動したのではないでしょうか。

斉彬公の場合は初入部の際一門四家集まつての祝宴に能の披露が行われ、斉彬公自身は余り能に関する記録はない。

一方、久光公については資料としては謡曲集と能番組だけである。この分析は筆者が初めてだと思うが、前述のように168曲中5回も印がついているのは鉢木だけであり、演能でも2回もご覧になっている。これは北条時頼と常世という武家社会で主従を結びつけ

る「忠義と奉公」の物語である。

久光公についてまとめられた芳即正氏は明治維新としようとすぐ西郷と大久保の名前が挙がる。しかし、薩摩藩が久光公を中心に挙藩統一行動をとった点が、幕末史上の特徴であり、倒幕戦での勝利を導く重要なポイントになったと述べて居られる。その後の「生麦事件から実質上の薩英戦争の勝利、反転英国との友好外交に繋がっている。このぶれない自信は筆者の推測でしかないが、能の世界を熟知されたことによる世界観からと思うのである。

以上のように時代ごとの代表的藩主のお好きな能の曲目やその活用の仕方を見てみた。江戸時代初期から幕末にかけて薩摩藩でも外交や自己研鑽の道具として活用されたことが伺える。

七、おわりに

能の良さを多々述べた。まずはご覧くださ
いと能舞台にご案内したいところである。し
かし、能一番演じるにはシテ、ワキ、地謡、
後見人、囃子方（笛、小鼓、大鼓、太鼓）、狂
言方、舞台下働きとざっと見積もっても22
名ぐらいの人数が必要である。しかも、それ
ぞれ専門として分かれていて、1年前から予
約しないと日時が揃えられない。能楽師の方
は公演での収入だけでは生活が出来ないので、
素人の弟子をとりその月謝で生計を立ててお
られる。能の公演、素人のお弟子さんともに
東京、大阪、福岡のような大都市に集中して
まいります。

そこで、地方で能公演を計画すると、前述
の故入来院貞子さんの「ほやき」が出てきま
す。今でもその努力を思うと胸が熱くなりま
す。

○鹿児島に縁のある能の曲名としては「俊
寛」と「鳥追舟」があります。俊寛は平安時
代平清盛の怒りをかい薩摩の「鬼界島（三島
村硫黄島）」に流刑（1177）になった話で
す。天文館中町アーケードの一角に碑が立っ
ています。明治末期までは俊寛堀と言って船
着場があり。ここから船出したと言われてい
ます。

筆者らは来年3月の御楼門復元を祝って、
祝賀能として、季節の良い10月31日（土）
午後、県民交流センター能舞台で、能「俊寛」
を公演の予定です。宝生流最高の演者の方々
に来鹿頂こうと計画しています。これが当初
の提案の一の矢になることを願っております。
月並みですがご理解とご協力をお願い申し
上げます。

（鹿児島県文化協会理事、鹿児島謡曲連合会
会長、鹿児島大学名誉教授）

編集後記・・・

■今年、重朝庵主には6月に米寿を迎えられます。心からなる祝意を表したいと存じます。また、会誌も15号と節目の号数になります。会誌で「貞子さんに再会」と再出発した本誌も回を重ね、あつと言つ間の9年間でした。各号で貞子さんの足跡を振り返ることができました。■筆者は茅書門を訪問するようになり10年経ちました。丁度第7回入来新能開催年（平成20年）の3月に鹿児島謡曲連合会会報「風姿」に一文を頂きたく貞子さんを訪問しました。その時以来重朝庵主には先達としてご指導を受けてきました。特に貞子さん亡き後は密教寺院の座主のような風格で、広い家屋敷を一人で管理し、早朝に墓参りをし、晴耕雨読の生活をして居られるように見受けました。心から天皇を愛し、日本語を大切に、感性鋭くウタの道を極めて来られるようにでした。筆者が特に多くしているのは、戦後の東京裁判史観の徹底批判。日本の歴史は天皇を中心に見ると言つてことです。その関連で渡白晃爾氏の著書を8年前紹介され、今やその著書数は20冊に及びます。その中に、断片的に話されていたことがよく出てきます。■本誌の投稿者にお子様達も加わって頂きます。

した。感謝。沢山の「子息」「息女」お孫さん、曾孫さんを得て、誠に贅沢な人生だと感服しております。さらに、令和時代の天下の行末を共に見守りたいものです（中西）。

■私は相星雅子さんと10年に一回9月の炬ばたセイ談会の席上でのお付き合いです。ありがとうございます。澁谷会長の追悼文にありますように、ありし日のお姿が思い浮かばれてまいります。心よりご冥福をお祈り申し上げます。■第15号におきまして6月上旬から原稿を送って頂き、順次余裕をもって編集作業を行うことができました。ありがとうございました。（下土橋）

「炬ばたセイ談」 第15号

炬ばたセイ談会会長 澁谷繁樹

編集担当 中西喜彦・下土橋渡

事務局T895-11402

薩摩川内市入来町浦之名130

入来院重朝方

TEL・FAX 0996-44-3586

印刷 新大同印刷株 (0996-30-1811)



令和元年秋

第15号

〒895-1402

薩摩川内市入来町浦之名 130

炉ばたセイ談事務局